

---

# 魔法少女リリカルなのはvivid ~ 王の残照

ぱむ～ん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはvivid王の残照

### 【Nコード】

N1993P

### 【作者名】

ばむん

### 【あらすじ】

「JS事件」または「帝王の肅正」から四年、事件の解決の中心部隊だった機動六課も既に解散。

新たに管理局の大將についたシャルルの下、管理局の新体制も隅々まで行き渡り、世界は平和な時間を過ごしていた。

これはそんな平和の中で王として葛藤する少女達の物語である。

注意、この作品は作者の前作『魔法少女リリカルなのはStickers』の続編に当たります。

出来るだけ、読んでない方も楽しめるように書きたいと思いますが、  
そちらを読まれることをオススメします。

## memory・01 (前書き)

書いてみましたヴィヴィッド！

これから主人公であるシャルルの登場は少ないかも……だってヴィ  
ヴィオは小学生だもの。

その代わりに、オリキャラは出すかも。

## memory:01

次元の海を中心世界『ミッドチルダ』

都市型テロ『JS事件』とそれに呼応して起きた『帝王の粛正』の発生と解決からは既に四年が経過して

対処に当たった部隊『機動六課』も既に解体

そして機動六課の戦術の切り札高町なのは一等空尉も現在はその翼を一時休めて

「ヴィヴィオ〜！朝ごはんだよ〜パパを起こしてきて〜！」

「はぁー！いつ〜！」

育ちゆくのは新たな世代

「パパー！朝だよ、起きて〜！」

これはかつての空のエース高町なのはの一人娘にしてザンクトヒルデ魔法学院初等科四年生高町ヴィヴィオの

「ん〜起きたよヴィヴィオ……おはよう」

「おはよう〜！」

帝王シャルルを巡る王達の鮮烈な物語

「お休み……zzz」

「ダメだよ！起きて！」

の筈である……

## memory・01 (後書き)

まだここまでしか書いてないです。

これからヴィヴィオを中心に書いていきます！

まだ二巻しか出てないので、追いついたらオリジナルの事件でも起こします

## memory・02 (前書き)

は「更新や！かなり悩んだ見たいやけど私でえへんしな……」

ちよ！？後書きまで待つてよ！まだ出番じゃないよ！？

は「ええやん？どうせ、後書きは私の独壇場なんやから！」

そうだけど、あああゝもう！本編始まります！



## memory:02

私、高町ヴィヴィオはミッドチルダ在住の魔法学院初等科4年生。  
『公務員』のママとパパの三人暮らし。

「ヴィヴィオ、今日は始業式だけでしょ？」

「そだよー、帰りにちょっと寄り道してくけど」

「今日はママも早めに帰ってこれるから、晩御飯は4年生進級のお祝いモードにしようか？」

「良いねー！……パパは大丈夫なの？」

「くっ！今日も遅くなってしまっ！すまんヴィヴィオ、ダメなパパで……これも全て、休暇をとってしまったゼストの所為だ！」

パパのお仕事は大変な物で、こんな風にお祝いの際に来れなかったりします。

それでも、本当に来て欲しい時には来てくれるし、終いには仕事を放って置いて来てしまったりする位、家族を大切にしてくれる。

いつもパパを仕事場に連れ帰るドゥーエさんには悪いけど、私はそんなパパが大好きです。

「気にしないで良いよ、お仕事頑張ってるね？」

「ああ、ありがとな、ヴィヴィオ」

「さて、それじゃ」

「うん！」

「「「いつてきまーす！」「」「」

そんな私達はたまに喧嘩もするけれど、近所でも有名な仲良し親子です。

「くそっ、自分の仕事を片付けられないなんて……」

「ヴィヴィオも言ってたけど、お仕事なんだからしょうがないよ。それに、その原因は私が早く仕事を終わらせられるのと同関係ない？」

「な、何の事だ？」

なのはとシャルルは行きが同じ為、車で共に仕事場へ向っていた。

「もう、惚けてもダメだよ？ドゥーエさんに聞いたんだから……。私とフェイトちゃんの仕事を管轄外なのに強引に休みにしたでしょ？」

「うぐっ……！」

当然そんな事をしてはいけない事ぐらい解っているし、直接ではなく間接的に、手を回したのだ。

なのはの部署の最高責任者が友人であった為に、そうなるようにシフトを組んでもらったし、フェイトは執務官として乗船する船の整備で休みとなっているが、整備の予定を一月ばかり早く繰り上げてもらった。

その過程で生じた仕事で、シャルルは仕事で遅くなってしまうのだった。

「気を使ってくれるのは嬉しいけど、余り無茶をしたらダメだよ？」

「解ったよ、今度から気をつける」

その後は和気藹々とした雰囲気でお互いに話を楽しんでいた。

ヴィヴィオはクラス分けを確認して、St・ヒルデ魔法学院の初等科の昇降口に向っていた。

「ヴィヴィオ！」

「ごきげんよう、ヴィヴィオ」

突然背後から声をかけられ、振り返ると、そこには自分の親友が居た。

「コロナ！リオ！」

朝の挨拶を交わして、話題はクラス分けの発表に移る。

「クラス分けもう見た？」

「見た見た！」

「三人一緒のクラス！！」

「『『いえーい！』』」

三人は喜びの余り、大きな声でハイタッチをした。しかし、Stt・ヒルデ学院は伝統ある学園のため、その声ははしたなく映ってしまい三人して羞恥に顔を赤く染める。

「三人して何の話をしているんだ？」

「せっかくまた同じクラスになったことだし俺達も入れるよ」

三人が楽しげに話していると、後ろから声をかけられ、振り返ると二人組みの姿があった。

「レイにアレン！二人も同じクラスなんだ！」

其処に居たのは三人の共通の友達である、レイ・ツキヨミとその親友アレン・クロウリスターの二人だった。

レイは黒味がかかった茶髪で金の瞳をしており、少し浮いた印象を持つが、性格故か多くの友達に囲まれるような人物だ。

その隣に立つアレンは、真青の髪にいつも瞳を閉じていて、胸元には銀色のロザリオを掛けていて雰囲気で見目な印象を受ける。

事実彼は凄く真面目であり、本を常に読んでいてヴィヴィオと同じく、無限書庫司書の資格を取得している。

「ええ！？ア、アレン君！？お、おはよう……！」

「おはよー！二人とも」

「おう、おはようさん、また同じクラスだ、よろしくな？」

「おはよう、元気そうで何よりだ」

朝の挨拶を交わして、昇降口を進んでいく。

「ああゝあ、始業式はめんどくさいなあ……」

「またその事か。諦めろ、頭の中でイメージトレーニングでもしていればそのうち終わる」

「なるほど、それも鍛錬か」

「またそれ？いつも鍛錬ばかり言って勉強はできてるのかなあ？」

二人の会話を聞いていたヴィヴィオは少し意地悪の積りで、そう投げ掛けた。

「だ、大丈夫だ！俺にはコイツが居るからな！」

「知らん、一人でやれ」

「何！？」

レイはアレンの肩を寄せ教えてもらうつ気満々である。しかしアレンはそれを手に持つ本から視線を外すことなく一刀両断、完全に拒否。

「まったくうー、一人で勉強しなきゃダメだよ」

「そ、そう言うリオは勉強はどんなんだよ！」

「私の成績知らないな？まったく問題なしだよ」

まるで全てが終わったかのように絶望気味のレイに、まったく気にした様子の見られないアレン。

「ア、アレン君？レイ君のことは良いの？」

「ああ、コロナか。問題ない、奴はすぐに立ち直るか」

「考えたってしょうがない！とりあえず出来るだけやる！」

「ほらな？」

何時も通りだと言わんばかりの態度に、コロナは小さく笑い、その顔を見てアレンも笑みを浮かべ、また本へと戻る。

そのまま彼女達五人は、荷物を教室に置き、礼拝堂のような場所に向った。



そこで始業式が行われ、恙無く終了した。

「はー、終わった終わったー」

「寄り道してく？」

「もちろんー！」

「また図書館よってこーよ！借りたい本有るし」

「うえ、それじゃ、俺はこれでお邪魔するわ」

「俺は彼女達に同行するぞ？昨日借りた本を全て読み終わってしまったからな」

レイは図書館と言う単語を聞き、げんなりした様子でその場から去ろうとしており、アレンは数冊入った厚みのあるかばんを持ち上げて意思表示をした。

「あ、帰るのちょっと待ってー！」

「何だ？本は身体が受け付けないんだ」

「教室で皆と記念写真撮りたいな。お世話になってる皆さんに送りたいんだ」

「撮る撮る！よし、すぐに教室に戻るぞ！」

レイが自分だけ一人で先に走って行ってしまい、その後を他四名で急いで追いかけていった。

「ヴィヴィオからメール？」

シャルルの手元にヴィヴィオからのメールが届いた。  
その中を開けてみると。

「はは、進級おめでとう……ヴィヴィオ」

そこにはあるメッセージとともに、五名で写る写真が添付されていた。

『皆さんのお蔭で、ヴィヴィオは今日も元気です!』

## memory・02 (後書き)

は「後書きコーナーでも登場！このコーナーの担当者は八神はやてと」

作者のばむぐんで、お送りします！

は「でもなんで私何？新キャラでたし、オリキャラにやらせたらええやんか。嬉しいけどな」

それは、はやてさんにこれからの登場が期待できないからです！せめて此処だけでも居てもらって影が薄くならないようにという配慮の積りです。

「そついえば、わたしvividで忙しく動き回ってるから二巻までで台詞が一個もあらへんな……」

う、暗くなってしまった。そ、そんな事よりも本編の話ですよ！新キャラの、レイ君とアレン君の二人！レイ君は紅さんが考えてくれたキャラなんです、中身が変わってしまったるな……すみません……アレン君は完全に作者謹製のキャラでレイ君の親友ポジションです。

は「それはええんやけど、何や既にフラグが立ってへんか？アレン君の方は」

気にしないでください。作者の好きな人物に補正が掛かっているだけですから。

勿論全てのキャラが好きだけど、特に、と言う事で。

それではこの辺でお暇しましょう！後書きを担当したのはぱむ〜んと

は「八神はやてでした！」

memory・03 (前書き)

更新しました！

……今日は大丈夫だな？よし！それなら早速

は「本編や！」

ああああ〜！！

## memory・03

「連続傷害事件？それで何故俺の所まで？何かあったのか？」

ヴィヴィオからのメールを返した後、周りに積み上げられた書類の山を片付けていたら、ギンガから連絡が入った。内容は傷害事件の様だが、態々此方まで連絡するほどの事件でもない。

『ああいえ……「事件」ではまだ無いんですが……』

益々可笑しい、事件にもなっていない物を仮にも大将に報告するのは異常事態だ。

シャルルは顔を引き締め、何が出てくるかと身構えた。

『被害者は主に格闘系の実力者。そういった人に街頭試合を申し込んで気絶させ、中には病院に搬送されるものも居ます。被害届けは出ていないので、事件扱いでは無いのですが、この犯人が自称する名前が気になりました』

「名前？俺に関係する人間なのか？」

『はい……自称『霸王』 イングヴァルト。古代ベルカ 聖王戦争時

代の王の名前です』

「な、んだと……？霸王を名乗っている？……映像を送ってくれ」

ギンガから映像が送られ戦闘の一部始終を食い入る様に見詰めるシャルル。

「間違いない……瞳は解らないが、この碧銀の髪に流れる動き……クラウスと一緒にだ……」

シャルルはその何処か拙い彼女の動きを見て、嘗て共に語り合った友の姿を重ねた。

「この件は了解した。一応警戒だけはしておいてくれ」

『解りました。では……』

「ああ、近い内に其方に向くから、妹達によろしく」

ギンガは最後に笑顔を浮かべ、『はい』と口にするそのままモニターを切った。

モニターが消え、静かになった部屋でシャルルは空を仰いでいた。



「我が娘の聖王、記憶を継承した霸王、聖王教会に居る冥王、そして帝王と呼ばれた俺……因果な物だな、数百年たった今、王が再び集う時代が来るとは……」

シャルルは時代を隔て王が集った意味を考えていた。

「休憩が終わったら、次は身体強化系、その後放出制御。それを終えたらスフィアを成形して、起動制御だ」

「ふはあゝ、ちょっと今日はハードじゃありませんかね？」

此処は市民公園の中にある公共魔法練習場。

其処に備え付けられているベンチに腰掛け、本に視線を向けながら練習を監督しているアレンとそのスパルタ気味の練習をこなしているレイが居た。

「お前が新しいデバイスの慣らしがしたいと言っていたから、メニューを組んでやったんだろ？それにお前が無理な動きをしなければ、身体に負担にならないようにしてある」

デバイスを待機状態に戻したレイの首に金のロザリオが光る。  
真ん中に嵌められた宝石が点滅している辺り、これがデバイスのよ  
うだ。

ちよつと其処の糸目！こんな練習をしてたらマスターが怪我する  
じゃない！もう少し考えて組みなさい！この似非クール！

性格に多少難有りだが、その性能はレイの両親がデバイス技師であ  
る関係でかなり整えられている。

「そんな言い方するな、暁。これは俺が頼んだ事だし、アレンが無  
茶をするようなもの作るわけ無いだろ」

レイは身体を解しながら、自身のデバイス・暁を窺っている。

しかしマスター、この糸目、さっきから此方の注意ばかりで自分  
は何もやるうとしませんよ？

「俺は運動はからきしだからな。その代わりこうして制御関連を教師役を受け持つてるんだ」

アレンは指の先から小さな球体を浮かべて、自在に動かして見せた。

「ああ……お前運動音痴だからな。確か校庭を一周するのモダメだつただろ？」

うわ、校庭一周もって……ウンチどころの話じゃないわよ？恥ずかしくない？虚弱体質？やる気あるの？

「黙れポンコツ」

何よ！

「おいおい、二人とも……ん？」

言い争いが続きそうな雰囲気なレイが止めに入った所で、公園の端から歩いて来る人影にレイが敏感に反応した。

「おお、来たか！ヴィヴィオオオー……！！」

「ちょ！？マスター、話はまだ」

「やれやれ……」

駆けていくレイをアレンもゆっくりと追いかけていく。

「ヴィヴィオ、あれお友達じゃない？」

「え？あ、ホントだ！おおい！」

公園に到着したヴィヴィオとなのはは、魔法練習場から駆けてくるレイに手を振っていた。

「はあはあ、今日も練習か？しかも既に大人モード……あ、なのはオバ」

「オバ……?」

「オ、お姉さん!こんばんわ!」

この公園でいつも練習を共にしているレイとヴィヴィオ。  
なのは何時も仕事の都合で偶にしか来れないので、二人の魔法制  
御関係の教師役は自然とアレンになる。

「へへ、実はねえ今日の進級祝いで……」

背中に隠れていた人形を手に乗せて前に出した。  
その手に乗せられていた人形が手を上げて意思表示をした。

「遂に私にも専用のデバイスが出来たんだ!」

「何だ、ヴィヴィオもか。俺も新しいデバイス!暁を貰ったんだ!」

「うわ!金のロザリオだ、アレンと色違いだね」

「おう!デザインを同じにしてくれって頼み込んだからな!」

なんか文句有るの！てかマスターに近付かないでよ！そんな大きくなってマスターを誑かすきなんですよ！

「え、えつと〜……」

「気にしないでくれ、コイツは起動してからずっとこうだから……お前のデバイス自律行動してんのな？」

お互いのデバイスを見せ合い、楽しそうに会話をしていた。レイは今更ながら、自分で動きを見せるデバイスに目を白黒させていた。

「あれ？そういえば今日も師匠は来れないのか？」

「うん、パパは今日も忙しいみたい」

「はあ〜、久しぶりに稽古をつけてもらえると買ったんだけどな」

二人だけではなく、ノーヴェもシャルルに指導を受けているのだが、正確にはシャルルはベルカ古流武術に該当するので細かい事は教えておらず、動きの斑や無駄を指摘し、実践を持って教えていた。

「まあ、それはそれとして、やっぱ良いな〜、大人モード……ヴィ  
ヴィオ綺麗だな〜。俺も術式組み込んでみようかな？」

「お前の場合はもっと魔力運用を覚えてからだ」

「げ！？煩い教師が……」

「ふん、……なのはさんこんばんわ」

「うん、こんばんわ、今日も先生？大変だね」

「いえ、慣れていきますので……そろ、休憩は終わりだ。練習を再開するぞ？」

「へいへい……そんじゃ、ヴィヴィオ一緒にやるか？」

「うん、基本の身体強化系からやる積りだけど……」

「問題ない、此方もその積りだった」

「よっし！そんじゃやりますか！」

照明に照らされた公園で二人は身体を動かし始めた。  
その光景を眺めながら会話をしている保護者二人。

そして……

「本日も異常なし。何時も通りの時間には帰宅すると思われます」

携帯端末を片手に車の脇からその光景を見ている男の影があった。



## Memory・03 (後書き)

は「どうも！司会進行役の八神はやてです」

……はむ〜んです……

は「あ、あのちょっと作者？何でそないな暗い雰囲気醸し出してんのや？」

取られた……前書き……

は「まあえっか！それで今回の話やけど、良く解らん伏線張り出したな〜大丈夫なんか？」

………出番削ってやろうかな………？

は「この流れやと、この次の話でとうとう霸王様がでてくるんとちやうか？あの子のお蔭で私らにも出番が！はよ進まんかなあ〜」

次回ゲストとしてレイ君とアレン君を此処に呼びます………

は「………話が一個も噛みあわないんやけど………」

## memory・04 (前書き)

更新ですよ！

遅くなり大変申し訳ありません。

これからは一定のペースでいける……と、思います

「お話って言うのは……例の傷害事件のことよね？」

聖王教会のカリムの執務室で四人の人間が顔を並べて会話をしていた。

四人といっても一人はモニター越しである。

「ええ、我ながら要らぬかとは思ったのですが……件の格闘戦技の実力者を狙う襲撃犯、彼女が自称している『霸王』イングヴァルトと言えば……」

チンクがモニターを操作し、事件現場を映し出した。

「ベルカ戦乱期……諸王時代の王の名ですね」

『そして、我が友であった……』

モニターの向こう側で、眼を閉じ昔を思い出すように目を瞑るシャルルが居た。

「時代は異なりますが、此方で保護されているイクスヴェリア陛下

や、ヴィヴィオの母体である『最後のゆりかごの聖王』オリヴィエ  
聖王女殿下とも無縁では有りません」

新たに三つのモニターが開かれた。

並べられた映像は、聖王、霸王、冥王そして、帝王の物だ。

「ヴィヴィオやイクスに危険が及ぶ可能性が？」

「無くはないかと……」

『聖王家のオリヴィエ、シュトウラの霸王イングヴァルト、ガレア  
の冥王イクスヴェリア。皆優れた王であつたからな』

「兄様、ご自分も入っていることをお忘れなく。それに嘗ての王達  
と彼女達が別人ではあるのですが」

「それを理解しない者もいると言う事ですよね。とは言え、『霸王  
イングヴァルト』は物語にも現れる英傑です。もしその血筋の者な  
らば、名を貶めるような事はしないでしょうけど……」

『別人というのはありえないだろうな、あの動きは間違いなく霸王  
流。まだ動きは稚拙だが、Sランクに迫る物を持っている、警戒す  
るに越した事は無いだろう』

「犯人が捕まるまでイクスの警戒を強化するわ。ヴィヴィオについては……」

「それはこちらで、私と妹たちでそれとなく……」

それから、仕事の話が一段落つき、世間話を交わしていた。

『そういえば、ヴィヴィオ達はこれからまた練習場か？』

シャルルは、ふと思い出したかのように、チンクに声をかけた。

「そう聞いていますが？何か伝言でも伝えましょうか？」

『いや、それならいいんだ。ただ最近見れてやれていないからな、悪い癖でも付いてないか心配だな』

「それならノーヴェが付いてますから大丈夫でしょう」

『そつだな……』

その後もシャルルは手を止める事無く、しかし話には確り参加して時間が過ぎて行った。

「ちえッ、俺も大人モードがあれば、一緒にスパーできたのに……」

「ごねるなよ。今練習してるんだろ？そのうち相手してやるよ」

空は既に暗くなり街灯が煌々と辺りを照らしている。

その道をノーヴェとレイは並んで歩いていた。

「ところでお前の親は何で整備調整にお前を呼んでたんだ？」

「たまにあるんすよ。何時も帰りが遅くなるくせに、ふとした拍子に激しく会いたがって来る……その所為で今日の高町家の食事を食べられなく……」

優秀な技師である両親を持つレイは、親の帰りが遅い為に近所である高町家、親友であるアレンの家に度々夕飯をご馳走になりに行っていた。

しかし、レイの親は溺愛する余り、関係者以外立ち入り禁止である仕事場にレイを呼びつける事があるのだ。

今日も我慢の限界が来たのか、呼びつけられたレイはノーヴェと共に歩いていった。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします」

と、そこで頭上から透き通るような声が呼び止めた。

「貴女に幾つか伺いたい事と、確かめさせていただきたい事が」

其処に視線を向けると、街灯の上に碧銀の髪美しい少女が立っていた。

「質問すんならバイザー外して名を名乗れ」

少女はノーヴェエの要求に答え素直にバイザーを外した。  
其処から出てきた瞳はヴィヴィオとは色が違うが、虹彩異色の美しい瞳だった。

「失礼しました。カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト。『霸王』を名乗らせていただいています」

「うわ、霸王って、あの霸王？物語とかに出てくるあれだよな？戦いてえ！なあ俺と戦ってくれよ!？」

「噂の通り魔か」

「否定はしません。伺いたいの貴女の知己である『王』達についてです」

ノーヴェエは王と言う単語に激しく顔をしかめ、レイは無視された事と自分には解らない事ばかりの会話に機嫌が悪くなっていく。

「聖王オリヴィエの複製体クローンと冥府の炎王イクスヴェエリア……」

理由は解らないが、少女の狙いがヴィヴィオ達であることが解った。しかし、感情を表に出していなかった目の前の少女は次の一言で一



瞬だけがらりと変わった。

「そして、蹂躪の帝王……」

その名を口にする時だけ、強い怒りの念を感じた。

殺意や恨みと言った物は感じない不思議な物だったが、確かにその瞳からは怒りを読み取れた。

「貴女は彼らの所在を知っていると……」

「知らねえな。帝王だ聖王のクローンだの冥王陛下だのなんて連中と知り合いになった覚えはねえ。あたしが知ってるのは、一生懸命生きている普通の子供たちと、自分を度外視にするほど平和を願ってる男だけだ！」

ノーヴェが感情の高ぶりのままに、己の友人、尊敬する師の存在を声高く叫ぶ。

昔など関係ないと、今を生きていると、それを認めさせるように。

「理解できました、その件については他を当たるとします。ではもう一つ確かめたい事は、貴女の拳と私の拳、一体どちらが強いのかです」

二つの視線が交わり、緊張感が高まっていく。霸王を名乗る少女の要望に答えるようにノーヴェは軽く身体を解していく。

「防護服と武装をお願いします」

装備を整えない物を攻撃するのは気が引けるのか、はたまた正々堂々とした物を重んじているのか解らないが、デバイスを出そうとしないノーヴェに警告らしい言葉を投げた。

「いらねえよ」

「そつで　　！？」

「無視してんじゃねえ！」

「お、おい、レイ！何やってんだ！」

何時の間にかデバイスを起動していたレイは、不意打ちのように横から霸王を殴りつけた。確り防御されたが、子供からは考えられないような力で殴られた事で警戒をさせるには十分な攻撃だった。

「どうもどうも！話は上手く飲み込めねえけどノーヴェさんと戦いたいなら、まずこの俺と戦え！」

memory・04 (後書き)

はやて「後書きコーナーナ〜!!」

イエエエー!!

はやて「新年一発目に更新する作品としては知名度も人気も無いけどな。まあ他の作品に人気があるのかと聞かれたら首を傾げるんやけどな」

言わんといて……

はやて「よっしゃ! 気を取り直してゲストよぼか」

ゲストは宣言どおり、レイ君とアレン君です!

レイ「ども〜!」

アレン「お邪魔します」

はやて「ゲストって言っても作者に妄想力、想像力その他不思議な力が欠けているから、特に何するとか決められてないんやけどな」

すみません。しかもこの三人でこのコーナー回そうかと考えてもいるんでネタを必死で考えてます、頭がパンクする……

アレン「人には得手不得手と言う物がある。作者は思い付きで書くタイプなんだろう」

レイ「おお！俺と一緒にか！」

アレン「お前はただ何も考えていないだけだ」

レイ「如何違うんだ？俺は何時もその場で思ったことをやってんだけど……」

アレン「自分で考えてくれ……。それで今日は何をしますか？」

はやて「あ、今日はこれで終わりやで？」

アレン・レイ「え！？」

頭が痛い……ネタが……ネタガアア……

## memory:05 (前書き)

更新します。

レイ君が戦闘むちゃくちゃです。

戦闘スタイルが奇抜です。割と強いです。

カートリッジのこんな使い方アリじゃね？と思いつきで戦闘作って  
しまった。

「貴方と、ですか……」

「そうだよ。悔しいけど、まだ俺より強いこの人と戦いたいなら、まず先に俺を倒してもらわないとな」

肩を回し、戦う準備をするレイの手足にはデバイスがセットアップされていた。

格好は黒のタンクトップに灰色のズボンで腰の左右にアーマーが付いているだけの軽装。

デバイスの形状は、手は小さなグローブ、足は膝から下に徐々に大きくなっていく脚甲の様だが、形が特殊で詳しく解らない。

足技の強化装備と考えるのが妥当である。

「ハア、たくしょうがねえな。そういう事だ、先にコイツが相手になるってよ」

「しかし、まだ子供……」

「甘く見てつと、痛い目見るぜ?」

ノーヴェの言葉の直後、視線の端に映るレイの拳を捉え、その場から後退する。

(今何が……)

半ば反射で避けたが、レイとの距離は5メートル以上開いており、一息で近づかれた事が彼女にとって予想外であった。

その異常とも言える速度の正体を掴む為に、先程と同じ距離を取って、冷静に様子を見る事にした。

その彼女の目がレイの足から昇る煙を捉えた。

「避けられちゃったか。だが次は当てる！」

まるでボクサーのように両足でステップを踏み、着地した瞬間に……

「ロードー！」

あいあい！マスター

姿が掻き消えた。

(これが先程の！？)

腕をクロスにして防御をし、反動を上手く流す為に後ろに飛んだ。



痺れる腕を振るい、次の攻撃に備える。

「ロードロードロードロード！」

あいあいあい！

繰り返し足から熱が排気され、高速で移動し続け攪乱する。

いや、攪乱しようとしてやっている訳ではない。

少しでも近付くとすぐさま対応してくる為に、近付き遠ざかりを繰り返し、結果として攪乱になっているだけである。

(ここを叩けば！)

レイが優勢に見えていた戦いだが、次第に目に慣れてきた彼女は打撲を受けながらも、未だに大きな攻撃は受けていなかった。

そしてレイの動きを読み、高速移動するレイの移動するであろう場所に、彼女は拳を置く。

速度を自分でコントロールしていなければ、高速の速度のままに自分から拳にぶつかる事になる。

「ロ、ロード！」

アイサー！

レイはその拳の直前で急停止し、片足で方向を無理やりに変えることで難を逃れたが、距離を取り停止した後、息を切らしていた。そして、それを見ていた彼女はレイの戦闘スタイルを理解した。足技強化の為と思われていた脚部のパーツ、その本来の働きは単純な移動手段、カートリッジを惜しみなく使用した高速戦闘による超速攻格闘戦型。

それ故に、精神力と体力を通常よりも激しく消費する。

「あゝ……これでクリーンヒットを一発も当てられないなら無理だわ。奥の手とか、まああるけど、あれはもう格闘技じゃねから……降参〜！体格の差はでけえ〜！！」

「……………え？あの……………」

多量の汗をかきながら降参を宣言すると、仰向けに倒れて深呼吸を繰り返していた。

「おや、終わってしまいましたか？」

「……………」

ビルの屋上で、二つの影が彼女達の戦いを見下ろしていた。

「とっ、言ってる傍からもう一方も戦いを始めてしまうようですね」

眼下では、ノーヴェと霸王による戦いが始まり、それを少しだけ興奮した様子で語る執事服を纏った赤髪の男。

「それにしても流石は霸王の名を持つ者。まだ未熟ではありますが、彼女はかなり強くなりますね」

「……………矢張りディンは気になるか？」

「それは勿論です。なんせ私は騎士ですから、戦いと言う物には目  
がありません」

デインと呼ばれた執事は興奮を落ち着かせるために、目に掛けてい  
たモノクルを拭く。

「……霸王、嘗て帝王と同じ時代に生きた者……見ておいて良かつ  
た。あの様子ではこちらの障害にはならないと報告できる」

「そのようですね、聖王の方も今は大した脅威に成りませんし……。  
ではマイロード、これで帰られますか？」

「ああ……行くぞ」

男を引き連れその場から姿を消す影。

消える瞬間に、月の輝きによって照らされたその瞳は、銀色に輝い  
ていた。

「我らの狙いは帝王のみ……」

「なに？霸王を捕まえた？」

漸く一日の仕事を終えたシャルルが帰り支度を整えていた所にスバル・ナカジマからの連絡によって止められた。

『捕まえたと言うか、保護というか……とにかくギンねえから連絡するように言われてたので、連絡させていたただいたしだいです』

まさか彼女の事を話し合ったその日のうちに、犯人を見つけるとは思っておらず、完全に寝耳に水である。

「解ったよ。被害届けも出てないし、嚴重注意で済むだろう。……君の親友もそう言ってなかったか？」

『あ、はい、言ってました！』

「それならそつちで頼んだぞ？此方も手が空いたら会いに行く」

『解りました！』

「……………ふう、とうとう会う時が来てしまうのか……………怨んでいる  
だろうな、クラウスの記憶を持っているのなら……………」

連絡を貰い、霸王を保護したと聞いたとき、最初に浮かんだ事はクラウスの怒りに満ちた言葉だった。

「会うのが怖いなんて、柄じゃないだろうに……………」

JS事件の最中でゆりかごの内部で再開したオリヴィエの時とは違い、今回は此方から会いに行かねばならないという状況が、彼を大きく揺るがせる。

クラウスとは親友と呼んでも構わない間柄だった。

その男を絶望させ、裏切り、本気の殺意を抱かせるまでに至った彼にとつては、例え本人ではないにしても会うのが躊躇われるのだった。

「許してもらうつもりは無いが、話はしなくてはな……………」

## Memory・05 (後書き)

はやて「どもども、後書きコーナーや！」

レイ「ちわっすー！」

アレン「どうも」

はい、どうも。今回ですが、レイ君の初戦闘ですね？その感想など如何でしたか？

レイ「いや、楽しかったすね！俺にも大人モードがあればもう少し戦えたんすけど」

アレン「あれだけでできれば十分だ」

はやて「そやで？大人顔負けやんか、十分強いで。しかも、カートリッジを攻撃につかわんなってまたおもいつきた設計やな……」

レイ「それは親父とその先輩が作ったらしいすよ？カートリッジの可能性とか何とか……」

アレン「連発仕様が当たり前なので、幾分か負担を減らす為に小型のようですが……」

「ほお、色々考えてんやな。……でも最後の方に出てきた二人組みが気になるなあ」

レイ「あ！それ俺も気になってました！あれ前にも出てきた訓練視

いてた奴と同じ奴なのか？」

はやて」「どうなんや作者？」

それは話が進んだらわかって来ますよ。それまでお預けです。

アレン「もう良い時間じゃないのか？そろそろお開きにしよう」

そのようで、それでは今日はこの辺で！

全『ばいばい……』



## Memory.006 (前書き)

更新です。

少し長くなってしまいました。見てやっってください。

## memory:06

「……これ等如何だ？」

魔法学院の図書室で、『霸王』に関する事を詳しく載っている本をアレンとコロナは探している。

「うん、ありがとう！これならちょうど良いかもしれない。ルーちゃんにオススメして貰ったのと合わせればヴィヴィオもきつと喜んでくれるよ！」

「ルー？……ああ、あの召喚士の。……彼女の事で思い出したが、俺が送ったデータは役に立ったのか？迷惑ではなかったか？」

「そんな事無いよ。あのデータのお蔭で私のデバイス、もうすぐ完成だって！」

コロナの魔法とアレンの魔法は似ていた。

そのためコロナがデバイスを作ると知ったアレンは必要なデータを適当に見繕い、連絡先だけ知っていたコロナのデバイス製作中のルーテシアの元に送ったのだ。

「それなら良いが……。ああ、それとあのデータの中に すま

ない、迎えが来たみたいだ」

「あ、うん……またね」

会話の途中、アレンの家から迎えが来た為話は其処で中断となった。外に待機していた迎えの人間と歩き去るアレンを見えなくなるまで見送ったコロナは、数冊の本を抱え、親友たちの元に向った。

「そう言えば、アレン君の家って何やってる人なんだろう？」

彼の家にお邪魔した事のあるレイも詳しい事は知らない。それどころか家族も見た事が無いらしい。見かけるのはスーツ姿の大人の男性のみで、家族という雰囲気でもなかった。

「ととつ、ヴィヴィオの所に運ばなきゃ」

止まっていた足を動かし、心なしか小走りで進んでいった。

「ヴィヴィオ、何か今日は元気ないね？」

「え？」

夕飯時、珍しくシャルルが早く帰り久しぶりに三人で食事を取っていた時に、なのはがヴィヴィオの変化に気が付いた。

「えと、実はね。新しく知り合った人と、来週練習試合をするんだ。その事を考えててちょっとね」

明らかに意気消沈していたヴィヴィオだが、それを感じさせないように笑顔を浮かべた。

「ヴィヴィオ」

「はい」

食事を中断して箸を置き、ヴィヴィオに話しかけたシャルル。ヴィヴィオは空気がばれて怒られるのかと身構えたが、ヴィヴィオの小さな頭に大きな手が乗せられた。

「全力でやって来い。ヴィヴィオの全部を伝えてやれ」

優しく撫でながら笑顔でそう言ったシャルルに、今度は作り笑いではなく、本当の笑顔でヴィヴィオは笑った。

「はい！高町ヴィヴィオ、全力全開でやってきます！」

「……………」

深夜遅く、シャルルは昨夜送られてきた自称『霸王イングヴァルト』本名アインハルト・ストラトスの個人データを閲覧していた。見れば見るほど過去、共に過ごした友と重なるその姿に目頭が熱くなる。

其処まで似ているわけでもないし、そもそも性別そのものが違うはずなのに、どうしても思い出してしまう。

「来週だったか……………」

自身の休みと娘の練習試合が重なる日。

日付を確認しながら考えていた。  
自身が最後に会ったクラウス達との事を……

「やっぱり心配？」

隣で眠っていたのはが眼を覚まし、シャルルに語りかける。

「ああ、ヴィヴィオにはああ答えたが……」

ヴィヴィオが過去のベルカ時代を知りたいと言って来た時、もう少し大人になってから、とはぐらかしたが語るのはそう遠くない日にやってくるかもしれない。

「知っておいても良いのかも……いや、知っておかなければならないのかも知れないな」

「シャル君……」

シャルルが過去を考えている時の顔は、何時も痛々しいほどに思い詰めているように感じられ、なのはを始めフェイト、はやても如何にかしたいと考えている。

聖王、霸王、そして帝王……

古代ベルカ諸王時代に生きた王族の人間。

いずれ優れた王であった彼らの関係は、現代の歴史研究においても明確になっておらず、唯一過去を知る帝王は頑なに語ろうとしなかった。

そしてヴィヴィオとアインハルトの練習試合が行われる当日。

シャルルは廃棄倉庫区画に向っていた。其処が試合の場所だからだ。

「もう始まったか……」

ヴィヴィオと一緒に行かなかった訳は、自分がどれほど怨まれているか解らないからだ。

そんな場所に一緒に行って、大切な試合を台無しにしたくない。

「結局は会うのだから、意味は無いのかもしれないけど……」

小さく自問しながら、足を進めていく。  
そして、後数十秒という距離まで迫った時、格闘戦技をしているとは思えないほど大きな音がした。

「子供と甘く見てると殺されそうだ……」

姿を見つけ近付くと、ヴィヴィオは気を失い介抱され、その傍でアインハルトがヴィヴィオの手を握っていた。

「終わったみたいだね」

気が付かれていなかったのか、または違う要因か。  
シャルルの声を聞き、驚いた表情を浮かべるアインハルトは振り返った。

「うはっ 師匠！来るなら最初からいれば良かったのに。すんげえ燃える試合だったんすから!？」

「し、シャル兄!？来てたのかよ!？」

レイはシャルルに気が付くと駆け寄り、今の試合を報告していた。



ノーヴェは純粹にきた事に驚いている。  
休みである事は知っていたが来ると言っていなかった。

「その子がアインハルトちゃんかい？」

シャルルとアインハルトの視線が交わった。

「あ……あ、あ……」

見つけた。

「あ、貴方は……」

記憶と寸分変わらないその姿、間違う筈がない。

「俺はシャルル、帝王を名乗っていた……」

彼が悲しみ、怒り、そして聖王と並んで超えられなかったもう一人。

「あ、ああ……あああああつ！！」

ヴィヴィオの時はこうはならなかった。

聖王の血を引いていても別人で、面影が幽かにある程度だったから。しかし、帝王は……

「そう、君の記憶の通り、あの時生きていた人間だ」

あの時のまま、記憶にある彼のままの姿でそこに居たのだから……

「うわあああああつ！！」

瞬時に武装し、そのまま殴りかかった。

それは一瞬の出来事で、周りに居た者達は止める事が出来なかった。

「ぐっ！？」

シャルルの身体に拳打が直撃した。

それは誰が想像できただろうか。

シャルルは反応できた攻撃を避ける事や捌く事をせずにその場を動かず、ただ痛みに耐えていた。

その後も拳の連打は続く。

「お、おい！何やってんだ！？止め」

ノーヴェ達は止めに入ろうとしたが。

「来るなっ！」

シャルルの声で止められた。

「これは許容しなければならぬ。それだけの事を俺は過去にした！  
！それだけ彼女にある記憶は深い」

アインハルトの攻撃をまともに受けながら、声を絞り出す。  
彼女の中の痛みが、自身が見つけた彼の痛みが少しでも晴れる事を祈  
って。

「……………っ！！」

暫らく連打が続いていたが、一瞬攻撃の手が止み踏み込みが変化し  
た。

「やべえぞ！あれは！」

それは霸王の必殺の拳。

バリアジャケットを着ていながら動く事が出来なくなるほどのダメージを負ったノーヴェはその危険性を肌で感じていた。まして、シャルルはジャケットを装着していない。

「来い、それが君の思いなら俺はそれを受け止めなくてはならない  
っ！」

その技の事も知っている筈なのに、微動だにしない。  
そして放たれる

### 『霸王断空拳』

その拳はシャルルの腹部に深々と突き刺さり、くの字に身体が持つていかれる。  
だがシャルルは、足を踏ん張りその場から数メートル滑るだけに留まった。

「かぶっ……もう終わりで良いのか？」

「お、おいシャル兄。もう無理だってこれ以上は流石に見てられねえ」

挑発のような台詞を言ったシャルルにノーヴェエやその場に居る人間が止めに入った。  
アインハルトも、顔を伏せ表情は見えないが一段落したのか大人しくなっていた。

「……は……しは……」

小さく細い声がアインハルトの口からつむがれる。

「私は……霸王<sup>わたし</sup>は、貴方に激しい怒りを抱いています！」

徐々に大きくなっていく彼女の声、そして彼女の瞳から流れる涙。

「貴方があんな事をしなければ、霸王<sup>わたし</sup>はあんな悲しみを抱かずに済んだ！貴方達は何時もうそうだ！霸王<sup>わたし</sup>の前を進み、何時も自己犠牲で済ませようとする！貴方なら彼女を……聖王を救えたのに……」

涙声でベルカ時代の記憶を語るアインハルト。

腹を押さえながらその言葉を黙って聞いているシャルル。

「貴方がもっと、霸王達を……信じて頼ってくれたら……打ち明け  
てくれたら……それだけが、霸王の心残りで……」

「ちょっと待ってくれ。それでは……彼は俺を怨んではないのか  
……？ 怨んでくれさえしなかったのか？」

彼女の発言にシャルルは驚く。

怨まれて当然だと考えていた、いや、シャルルの討伐軍に加わった  
クラウスを考えると怨まれた方が楽だった。

「先程言ったように貴方に怒りの念を抱いています。自分は頼る事  
も出来ないほど貴方にとって小さい存在なのかと悔しさも抱きまし  
た。でも……」

そこで言葉を切ると、アインハルトは目を逸らさずにシャルルに向  
き直る。

「貴方の事を……霸王は怨む事など出来なかった……兄のような存  
在で、親友で、遙か高みに立つ貴方を……霸王は憧れていたのです  
から。だから、だから」

「もういい。もう良いよ、今度落ち着いたらゆっくり話そう……此処で全部出せるほど、数百年は短くない。だから今はその涙を……ね？」

涙ながらに語る彼女にシャルルは近寄り抱きしめ、子供をあやす様に優しく撫でた。

「う、ううっ……」

性格なのか大声は上げなかったが、それでもシャルルの腕の中で顔を隠すように声を殺して泣き続けた。

新暦79年春、この日が高町ヴィヴィオとアインハルト・ストラトスが出会った始まりの日であり、帝王シャルルにとって一つの節目の日となった。

memory・06 (後書き)

はやて「後書きコーナーあゝ」

レイ「来た来た！此処まで着たらいよいよ旅行だ！」

アレン「馬鹿者。気が早すぎだろうが」

レイ「大丈夫だって、ほら水着だってもう買ったんだぜ？」

でもねえ。書いててなぜだかレイ君だけ置いてけぼりになってしまっ展開が……

レイ「な！？何で俺だけ!？」

成績が……あれだから……

は・ア「あゝ……」

レイ「何とかしてくれ！ヴィヴィオ達の水着が見れない！」

アレン「お前……そんな事の為に必死に……」

はやて「十歳からこれってちょっと引くわ……いや、これが普通なんか、私らの周りみんな精神的に大人やったからなあ」

なのはの登場人物はみんな大人だよ。まあテストに関してはアレンに教えてもらえば何とか成るだろう。



レイ「よ、よし！これで旅行にいける！」

アレン「……………これが終われば……………」

レイ「ん？如何した？」

アレン「なんでもない。それよりも勉強だ」

レイ「うげっ！？」

はやて「それでは学生二人が勉強に入ってしまったので、これで終わりや。また次回、楽しみにしたってやあ〜」

## memory・07 (前書き)

更新です。

もうすぐ単行本追いついてしまう。

オリジナルの為に色々やっていますが、それを入れると可笑しくならないか心配。

続きの巻で確認したい。

色々愚痴りましたが、本編どうぞ！

「た、助けてくれ……もう、俺は……！こんな事、やりたくないんだ！！」

沈痛な面持ちで、絞り出すように声を出すレイをアレンは冷ややかな顔で見下ろす。

「ダメだ、続ける。それ以外にお前の未来は無い……」

冷たく言い放つアレンの顔は滑稽だと言っているかのように、笑みを携えていた。

「くそっ！何で……何でこんなことに……！」

自分がやらされている忌々しい物を睨みつける。  
其処には……

前期試験用対策問題。作アレンと書かれていた問題集が置かれていた。

「こんな事なら、お前を頼るんじゃなかった……」

「その場合お前は赤点で旅行に行けず勉強漬けになるだけだ」

「その通りになる可能性大でした……」

ただ今初等科、中等科共に試験の真っ最中。

そしてその後の試験休みの四日間に、男が少ないからとシャルルの誘いで共に旅行に行く事になった。

しかし、問題はその条件だった。

「くそっ！全部六十点以上だなんて無理に決まってるじゃないか！」

「いや、凄く譲歩してくれた方ではないのか？暗記物が多いし何とかなるだろう」

「お前には解らないだろう！俺の頭から伝って出る単語を！」

「馬鹿な事やってないでさっさとしろ。もう時間が無いぞ」

放課後、教室でアレンの監督の下黙々と問題を解かされるレイ。

「もう……ダメだ。俺を置いて行ってくれ……」

机に突っ伏し、知恵熱で熱くなった頭を机で冷やす。

アレンはそれを見て首を振り、溜息を漏らした。

その台詞がレイから吐き出されてから既に5回、こうなったら十分は動かない。

「これが時間のロスだと言うのに……。それなら今日は」

「あれ？レイにアレン。まだ残ってたんだ。試験勉強？」

終わりにしようとして、声を掛け様とした時、クラスの扉が開かれ、ヴィヴィオが顔を出した。

「ばつちり勉強してたぜ！旅行に行く為だからな。だけどアレンの進行が遅くて、少し止まってたんだ。さあ〜と！勉強進めようぜ」

「……………」

ヴィヴィオの声が聞こえた途端に、人が変わったかのように元気を取り戻し勉強に取り掛かるレイの姿に、アレンはジト目で見続ける。

「あはは、うん頑張ってるね？旅行楽しみにしてるから！それじゃね」

荷物を取りに来ただけの状態で、自分の机から荷物を取り出すとそのまま教室から出て行った。

「うんうん、勉強楽しいな」

「……………それなら俺いらさないな？帰る」

「ちょおおおっ！？待ってくれ！ホントに待って！？」

こうして、試験前日は過ぎて行った…………

「ふ、ふふふ……ふはははははっ！やれば出来るじゃないか！この高評価の数々！まだ夢を見ているようだ！」

テストの結果を手に高笑いをしながら、喜びを表現しているレイは一人好奇な視線を浴びていた。

「傾向と対策を確りこなせば、それくらいは確実だ。今まで勉強をしなかっただけで頭は悪くないんだからこれからサボるなよ？」

その横でテストを仕舞いながら、今回の反省を促すアレン。

レイも頭の回転は速いのだが、勉強というものを嫌い、それが今回のレイにとっての地獄に繋がったのだから反省して欲しいものだ。

「解ってるよ。よっしゃあー！！このままヴィヴィオの所にダッシュユダゼ！」

「やれやれ……本当に解ってるのか？」

この後ヴィヴィオ宅にお邪魔して、そのまま旅行に行く手筈になっている。

アレンは既に荷物を詰めたかばんを持ち、レイが走っていった方向に歩いていった。

「試験終了お疲れ様」

「みんなどうだった？」

ヴィヴィオ宅で学生組みは揃い、試験結果を見せていた。

「そうだ。レイ、お前は如何だった？俺が科した目標は超えられたか？」



「ふっふっふ……甘く見てもらっては困るよ、師匠。俺が本気になれば如何って事ない！」

自身有り気にテストを掲げた。

確かに其処に記された結果は目標を超えて七十台だった。

「しかし、この場では一番点数が低い事を忘れるな？」

アレンのキツイ一言で体育座りで拗ねてしまった。

「アレン君は相変わらず満点…… + ？」

アレンのテストだけ百点満点ではなく、百二点と書かれた項目があった。

それも一つではなく複数だ。

「先生が間違っていた文法や、その他諸々を指摘したら点数をくれました」

「流石は皆の先生だね。これならみんな堂々とお出かけできるね」

「じゃ、みんなは一旦戻って準備しないとね？」

「ああ、車を出そう。フェイト、親御さんへのご挨拶があるから一緒に行けるか？」

「うん、大丈夫だよ」

シャルルが車を出しに家から先に出て行き、それを追う様にフェイトとレイ、コロナ、リオの四名が出て行った。

「あれ？アレン君も準備に行かないと」

「いえ、僕は準備を終えてきましたし、家には仕事で両親も居ませんから……」

「そうなの……？」

なのはが追いかけない彼を気に掛け話し掛けたが、素っ気無い言葉で返された。

「ア、アインハルトさん!？」

そこで驚いたヴィヴィオの大声が響き、来訪者の知らせがあった。

「僕は構わないのでこちらに行かれたら如何ですか？」

「あ、うん……。それじゃ、少し待っててね？」

足早に玄関に向うのはを後目に、アレンの胸元のロザリオが一瞬輝いた。

「霸王……。まさかこちら側に加わるとは……。戦力の計算をし直さなければならぬ……」

薄っすらと瞼が開かれ、そこから銀色の瞳が覗いていた。

「ルーテシア……ハア、ハア、ハア……こんな物で良いか……？」

息を切れ切れにしながら、ペンションの屋根に登る娘のルーテシアに声を掛けた。

「ありがとう、パパ！……これで準備は完璧！今回のおもてなしは過去最高！」

自分で設計し、協力を得ながら創り上げた数多の施設を見渡しながら、達成感を味わい、これから訪れる皆の反応を想像しながら意気を上げていた。

「皆さんどーんと御出でませー！……ふはははっ！……」

上がりに上がったテンションで、誰も居ない広大な草原に向かって吼えていた。

「……ルーテシアの為とは言え、一週間徹夜は……流石に……」

「……」

すぐ横まで寄ってきたガリユーに労わる様に肩を叩かれた。

「ああ、悔いは無い……このまま倒れても悔いは」

「貴方々ルーテシア、スープの味見手伝って」

「すぐ行くぞ！」

走りはしないが、その呼びかけ一つで元気を取り戻し、足早に家に戻っていくゼスト。

「……………」

それを見ていたガリユーは肩で大きく溜息を漏らした。

Memory:07 (後書き)

アレン「後書きコーナーです」

レイ「今日は何かテストの事が多かったな……。地獄の期間が終わって一安心したんだけど、試験は忘れた頃にやってくる！気をつける！」

アレン「訳が解らん。確り勉強してればそんな事にはならん」

そうだね。確りしておけよ？

レイ「作者！知ってるぞ！お前も勉強をやらなかった人間だろう！」

な！？トップシークレットな事項を何故お前が知っている！？

レイ「その場のノリだ！」

なん、だと……！？

アレン「收拾が付かんのので、これで失礼させていただきます。はやてさんはお仕事が大変だと今日は居ませんでした。それでは……」

## memory:08 (前書き)

お久しぶりの更新です。

最近忙しくなりました。

もっと更新が遅れる可能性が……

無人世界カルナージ。

其処が今から行く旅行の行き先だ。

首都から臨行次元船で四時間、無人世界だけあって誰も好き好んでいくような所ではない。

文明の利器に頼り切っている現代の人間にとっては足が遠くなるよ  
うだ。

「自然がいつぱいで、いい所なんだけどな……」

一年を通して温暖な大自然の恵み豊かな世界。

まさかこの世界で、あんな事件が始まるとは誰も予想だにしていな  
かった。

「皆さん、いらっしやうい！」



満面の笑みを浮かべて迎え入れるのは、この世界で暮らすルーテシアと、その母メガーヌ。

そして、かなり疲労の色が濃い、父であるゼストの三名だった。

「どうした？かなり疲れているみたいだが……？」

「いや……、そのうちお前も解る……」

「あらあら、貴方、あちらで少し休まれたら如何ですか？」

メガーヌはやつれて疲労の色が濃いゼストの手を引きながら、部屋の奥に連れて行った。

「一体何が……？」

シャルルは彼の力量やスタミナなど、他の人間から群を抜いているのを知っている。

それ故に、彼があそこまでやつれてしまう事とは何だったのか、非常に興味を引かれる。

その後、先に到着していたエリオとキャロを交えて会話をした後、局に所属している大人達はトレーニングに移り、子供達はその間を

遊んで過ごす事になった。

大人達の間にはエリオ達が混ざっているのは当たり前のように受け入れられていた。

「……………どうなんだ、それは？」

「おう！っ！アレン！なにやってんだ、早く来いよ！？」

「……………言う事だったのか……………よく出来たな、こんな施設が……………」

目の前に広がるアスレチックフィールドとレイヤー建造物が列なる訓練場があり、様子を見に来た数ヶ月前には無かった物が所狭しと広がっていた。

「シャルルさん？如何したんですか、そんなに涙ぐんで……………」

「いや、父親と言う者の偉大さをひしひしと感じ、俺も見習わなければな、と……」

心配して聞いたエリオは、憔悴し切ったゼストを思い出し、苦笑いを浮かべた。

「それじゃ、早速始めようか！」

なのはの号令の下、お昼前の軽い運動が開始された。

「うつぶ……もうダメだ、俺は此処で休む」

「「「「はやっ!?!?!?!」」」」

川遊びを始めてから数分。

アレンは水に浸かり数メートルを泳ぐと、力尽きて川原で横たわった。

「おいおい、もう少し何とかなんねえのか?」

「ああ、諦めた方が良いでしょうよ、ノーヴェさん。コイツ運動はからつきですから」

「いや、これはもう病気の域だろ……?」

レイ以外は呆れ半分驚き半分で、その力尽きている姿を見ていた。体育の授業などは何時も休んでいた為に、まさか此処まで体力が無いとはヴィヴィオ達も知らなかった。

「えと、アレン君大丈夫?」

「問題は無いが、何時も以上に身体を酷使しすぎた……」

日常生活をするくらいの運動ならば問題ないが、走ったりするとすぐに息を切らしてしまう。

「んじゃ、アレンはおいといて俺たちは遊ぼうぜ」

最初は心配していたヴィヴィオ達だが、暫らくすると全力で遊んでいた。

「体の方はもう大丈夫ですか？」

体力が回復し、座りながら遊んでいたヴィヴィオ達を見ていたアレンに、アインハルトは話しかけていた。

「ええ、それなりに……」

「そうですね」

お互いあまり会話を楽しむタイプではなく、それ以降会話が成立せず静かな時間が流れる。

「あの……」

最初に口火を切ったのはアレンだった。

「霸王の子孫だとか聞きましたが……」

「え？ええ、私は霸王の血を色濃く受け継いでます。その記憶と共に」

「そうですね……、ならば貴女は、彼の意思を継いで何かを成そうと？」

「それが霸王の願いであり、私の想いですから……」

アレンは小さく「そうですね」と口にする、それ以降口を開く事は無かった。

アインハルトはノーヴェに言われるがままに川遊びに入り、楽しそうに遊んでいた。

「霸王の願いが彼女の願い……それならば俺は……？」

「そりゃあっ!!」

勢い込んだ声と共に水が左右に割れる。

「あああ!?また負けた!」

「むう……」

水斬りと呼んでいるそれは、遊びの一種だが良い訓練になり、打撃のチェックも出来る。  
今は誰が遠くまで斬れるかと競っていた。

「あはははっ!また俺が一番!次は誰だ?」

得意気に鼻を鳴らすレイはこの中で一番水斬りが出来た。  
まだそこまでの身体的差は出て来ていないが、男の子らしく筋力や  
体力が頭一つ抜き出てき始めた為だろう。

「おお、調子良いじゃねえか。シャル兄の弟子を名乗るだけの事は  
あるな」

「そうだよな、パパってば最近、暇があると私と一緒にレイ君の練  
習も見てるもんね」

シャルルは暇が出来ると、ヴィヴィオとレイ、さらにはノーヴェエの  
練習を見ていた。

ヴィヴィオは娘、ノーヴェエは既に格闘の形が作られていた為に、シ  
ヤルルにとつての初弟子であるレイにだけは嬉々として厳しい訓練  
を与えられていた。

「打倒師匠ってか？」

「いやいや、あんなオバケ、倒せるわけ無いですよ。この間なんて  
水斬り見せてくれて言ったら……」



ある川の上流にある滝のそばで短期であるが二人だけで訓練をつけて貰っていた時期の事。

『え？水斬り？いいぞ、はははっ！』

滝におもむろに近付いたシャルルは、拳を構え、軽く構え振り切るとそのまま凄まじい音を立てながら、滝が真つ二つに割れた。

「はははっ！つとか言いながら、笑顔で滝を割ってた……」

「それはまた……」

「あははっ！パパなら出来るね、私も見せてもらった事あるし、魔道師としても最高峰だって話を誰かから聞いたこともあるよ」

「うひゃあ、ヴィヴィオのパパって凄い人なんだね……」

リオとコロナはその話しを聞き、流石に作り話だろうと思ったが、ヴィヴィオまで加わると、事実であるのだろうと、驚きをあらわにした。

「まあ、あの人は暫定SSS、計器がぶっ壊れる位だから正確には測定不能なだけだな」

「そんな人にどうやって勝てと？やはり衰えを待って、背後から…」

「あの人と俺たちの年の差は十数年しかないんだぞ？あの人が衰えている頃には俺たちもそうなる」

冗談を口にするレイにアレンは背後から近寄りささやいた。

「そうだった…ってアレン！？もう大丈夫なのか？」

「ああ、泳げはしないが、会話に参加は出来るしな。……それに近いうち……」

「ん？どうした？」

「なんでも。それよりもつすぐお昼だ上がるっ」

アレンに言われてレイがお腹を鳴らし、その音で皆が笑った。

何時までもこんな風に笑えたらと祈りながら……

Memory・008 (後書き)

どうでしたでしょうか？

感想ご指摘何でも待っています。



「「うちそうさまでしたー！」

お昼を美味しく食べた彼女たちは思い思いの行動をし始めた。

レイもそんなうちの一人。控える練習会に向けて、メンテナンスをした後アレンを探していた。

「あれ、アレンのヤツ何処行つたんだ？この後、明日の為に暁の性能設定を見てもらおうと思つたのに……」

『良いじゃないです、あんな糸目なんか！それより私をもっと弄つて下さいー！』

「そついう訳にも行かないだろ？お前だつてアイツの調整がどれだけ良いか解つてる筈だろ。しかも、最後キモい」

『うう………』

何時も最終調整だけは、アレンに任せて完全な状態にしているレイはアレンの調整には全幅の信頼を寄せている。それは調整を受けている本人だつて理解していた。

「……ん？おおっ！いた！お〜い、アレン！」

大声を上げてても気が付いていない様だ。

それならば、と気が付かれない様に背後によって驚かしてやること考えたレイは、細心の注意を払い近付く。

「……か、解った」

（誰と話してるんだ？）

ギリギリで話し声を聞こえる所まで来て、レイは不思議な事に気が付いた。

アレンがいる所にはもう一人誰かが立っていたのだ。

ここカルナージに来る船は自分たちが乗って来た一本のみで既に無く、次に来るのは四日目の帰りの便のみの筈なのだ。

「ああ、やるぞ。お前も……しておいて……」

（むむう、聞こえないぞ……？）

「解った、それではまた後で。ありがとうディン」

その名前には聞き覚えがある。  
確かアレンの家の執事さんだった筈だ。  
そこまで聞いた所で、相手の気配が一瞬で消えた。  
転移？

「……レイ？どうしたんだこんな所で」

「え、ああ……そう！お前にコイツを見てもらおうと思ってな！」

何事も無かったように話しかけてくるアレンに、レイは暁を出して半分だけ嘘を付いた。  
何故か解らないが、秘密であっていたのだから何かしら理由があるのかもしれない。

「なるほど、解った。明日に向けて、俺も調節しておこうか。道具が無い、場所を変えよう」

「え！？お前も出んのか？やめておけよ、死んじまうんじゃないか？」

「……失礼な。お前が俺の事を如何思ってるか、大体わかった。その言葉を戦場で後悔させてやるっ」



「うえ！？ちょっと怖いんですけど……」

「安心しろ。調整はしてやる」

歩きながら、何時ものように軽い口を叩く。  
調整の道具をルーテシアに借りてロッジに向う。

「ルーテシアさん、デバイスの調整をしたいので、道具借りますね？」

「借りますっ！」

「いいよ、あーアレン君？後で相談があるの、コロナのデバイスの事なんだけど」

ロッジに戻ると、ルーテシアだけがそこにいた。

「それは構いませんが、コロナは？本人がいた方が良いでしょう？」

「それなら練習場よ。今、なのはさん達の訓練を見学してるわ。それに、デバイスの方は君が送ってくれたデータの事だから、貴方だけで良いの」

「え！？マジで！？俺も見ておきたい！悪い！俺そっち行くから調整、後にして！」

両手を合わせて、拝む様に頭を下げた。

「解った、夕飯の後くらいに……って、もういないし」

レイは返事を最後まで待たずにそのまま駆けて行った。

速攻を得意とするだけあり、足も素のままでもかなり速い。

「ルーテシアさん、俺の時間は今空いたみたいなので、その相談事と言つもの今からでも良いですよ？」

「あれ？貴方は見に行かないの？」

「ええ、俺はあまり興味も無いですし……」

「そう、ならお願いしちゃおうかな？とりあえず、作業が出来る書庫に移動しましょうか？」

二人はそのまま書庫に向って歩き始めた。

「送ってくれたデータを見る限り、貴方って召喚士よね？」

「ええ、俺は動き回るのに向いてませんし」

「やっぱりそうなんだ！それじゃ今度貴方の家族も紹介してね？」

家族、それはガリユーと呼ばれるあの召喚獣の事だ。

彼女の力はその召喚獣を見れば大体わかる。

「残念ですが、俺は基本的に無機物召喚ですから……」

コロナと似ているのはこの部分である。

コロナの作り出すゴーレムは召喚魔法に分類され、その作り出す速度を上昇させる為にデータを送った。

アレンは、基本的に無機物召喚しか人に見せていない。

「あらら、残念」

そうこうしている内に書庫に到着し、そのまま作業に入った。

ルーテシアの相談とは、データの中に古代ベルカの文字群の解読だった。

「ベルカ式だったけどミッド式に応用できまし、すごく助かったんだけど、どうしてもここが解読できなくてね？結構解読には自信があったのに、ちょっと残念……。送ってくれた君なら読めるかなって思ったんだけど、どう？」

渡されたデータを見て、アレンは苦い顔をした。

「すみません。関係ないデータを送ってしまったみたいです。これはデバイスには関係ありません」

「え、そうなの？」

「はい、それにこれは方言が入りすぎてるので、解読できなくても

しょうがないです。これはすぐに消しておかないと……」

「へえ、ちなみになんて書いてあるの？お姉さん気になるなあ」

隠すようにデータを消そうとするアレンに、ルーテシアがにじり寄る。

ワキワキと手を動かす様は、まるで変態なオヤジのようであるが、この少女がやると、可愛らしく見える。

「気にしないで下さい。これは歴史文献と言う物です。聞いても面白くありませんよ」

僅かに後退して距離を取る。

「歴史文献！？それ凄く読みたい！消さないで私にこのまま預けておいてよ！きつと解読するから！」

どうやら知識欲を刺激してしまったらしい。目を輝かせてさらに距離を詰めてくる。

「ふう、しょうがない。解りました、このデータはルーテシアさんに差し上げます。もう終わった事ですしね……」

「やったっ！ありがとう。……何が書いてあるのかな？」

データの入った端末を手に、涎が垂れそうな勢いで、食い入るように文字群を見詰める。

「あ、でも解読するのはこの旅行が終わってからにしてくださいね」

「勿論解ってるわよ。でもそんなデータがあるなんて、アレン君の家って何か研究されてるの？」

「そんなところですよ。それじゃ、俺はこの辺で戻りますね」

「うん、アリガトね、また何かあったらよろしく！」

そしてその夜。

「放せっー！俺はまだ何もしてない！」

「……」

鎖に絡まり、身動きが取れない状態でレイとアレンが縛られていた。

「ただ少しだけ温泉に行こうとしたただけなんだ！！」

「今が女性の入浴時間と知ってたか？」

あれだけ綺麗どころが揃えば、覗こうと思つのも無理ないかもしれないが相手が悪い。

阿修羅の如き顔で、二人を見詰めるダブル父。

犯罪者ならこの瞬間に失禁しても可笑しくないだろう。





「賑やかだなあ……」

memory・09 (後書き)

どんどん行きますぞー！

Memory: iio (前書初)

一話目！

今日は練習会当日。アレンは早くに起きて散歩に出ていた。人がごった返している都会と違い、静かで落ち着くその空間はアレンに考えるゆとりを与えた。

「今日で終わりだ。すべて……」

その決意を固めた顔は、何処までも冷たく、何処までも無表情。何時もあまり表情を変えないアレンだが、今はそれすらも甘く感じるほどに生気が消えているようだった。

「あーアレン君ッ！オハヨー！」

「お早う、コロナ。どうしたんだ？今日は機嫌が良さそうだな」

コロナに挨拶されたアレンは振り向くと何時もの表情に戻っていた。一瞬の変わりようにコロナは気が付かず、笑顔のままデバイスを見せた。

「うんっ！ルーちゃんとアレン君が作ってくれたブランゼルと練習してたんだけど、この子賢くて私にぴったり合わせてくれるの！」

「俺は作ってない。データを渡したただけだ」

「良いの」

その場で回転でも始めてしまうのではないのかと言うほど上機嫌で、何時も大人しい彼女が別人のようだ。

「今日はよろしくね？」

「ああ、同じチームだ、できるだけ頑張ってみるさ」

チーム分けが発表され、アレンとコロナは同じ赤組で、他にフェイト、ティアナ、キャロにノーヴェ、アインハルトがいる。対して青組はレイが入り、ヴィヴィオ、リオ、なのは、ルーテシア、スバルにエリオと言った構成になっている。

シャルルが居ないのはチームバランスが崩れるからだ、最終日には確りと組み込まれている。シャルル一人とそれ以外というなんとも可笑しな組み合わせだが、本人談では何とか成るらしい。

「さて、そろそろ戻ろうか」

「うんー」

もうじき朝食の時間である。

その後少しした後にいよいよ練習会が始まる。

「え、ルールは昨日伝えた通り

」

ルール説明を受けそれぞれがチーム同士での作戦会議に移った。

「とりあえず、俺の相手はアレンだ。そう言えばアイツと魔法戦や  
った事無かったな？」

レイはアレンと同ポジションに配置され、アレンとぶつかる事にな  
る。

今まで練習に付き合ってもらっていたが、本人と戦うのはこれが初めてだ。

「ああ、アイツ俺の手の内全部知ってんだよな……」

使ってくる召喚魔法はある程度知っているが、アレンが使っているところは授業などで少しだけ見たのみ。どうやって戦うのかは全くの未知数であった。

「まあいいか。俺に出来るのは敵に近付いて殴るだけだ！」

レイは接近オンリー。

シューターも多少撃てるがあまり命中率が高いとはいえない為、ほぼ使わない。

『それでは、みんな元気に……試合開始！』

中央にあるモニターが開き、そこに居たメガーンが開始の合図を出し、ガリューが銅鑼を鳴らす。

シャルルはその横でゼストと共に将棋を指していた。

「よっしゃッ！ほんじゃまいッ！チヨ！突貫だアッ！」

『さすがマスター！その考え無しに突っ込む姿が最高です！』

既に試合が始まって数秒、周りには自分以外居らず、静かに歩いていく。

全身を黒いローブで包んだアレンは自身のデバイスに語りかけた。

「目的は均衡が崩れるまでの時間稼ぎ……。起きろ、ミッドナイト」

『どうした、坊？久し振りじゃないかの』



ずっと持っていた銀色のロザリオの中心に埋め込まれていたコアが点滅を開始した。

「そうだな、今日もたいした用事じゃない、二枚用意するだけだ。  
一秒以内だ」

『もう出来とるよ。何じゃ、本当にたいした事無い用事じゃな?』

「すぐに忙しくなる。はっ！」

指の間に二枚の紙が挟まっており、アレンはそれを地面に向かって投げ捨てた。

「わが忠実なる者たちよ。今、仮初の命の下、我が敵を殲滅せよっ  
！」

捨てられた紙を中心にベルカ式の魔法陣が形成され、その紙を核として、人間大のゴーレムが二体作られた。

一体は剣を手にし、もう一体は盾を持っている騎士タイプであった。

「うおっ!?!何かおるし!」

「相手をしてやる。来いレイツ！」

「ヘッ！速攻かたして、ヴィヴィオのフォローに回ってやる！」

「どうした？先程から彼らばかり見て……」

試合が始まってからというもの、シャルルは食い入るようにモニターを見詰め何かを考えているようだった。

「彼、アレンの魔法だが、珍しいと思っただけだ」

シャルルが熱心に見ていたのは、アレンが使った召喚魔法。

実際はコロナと同じ、何かを核としてゴーレムを生成するという、そこまで珍しくも無い物だ。

「そうですね？ゴーレム創造はメジャーと言うわけではないですが、そこまで珍しいと言える魔法ではないと思いますけど。私としてはレイ君の戦い方が独自性があって好きかしら？」

ゼストと話をしていたら、横で聞いていたメガーヌも加わってきた。

「ああ、それは言えている。子供ながらの発想をよくあそこまで形にした物だ。そしてそれを叶える彼の両親のデバイス技師としての腕も相当だ」

絶賛とまでは行かないが、かなりの高評価を付けられている。実際レイは、並の武装局員ならば、あのスピードに付いて行けずに倒す事が可能だろう。

「だが、確りと喰らい付いている」

そのスピードに翻弄される事無く、アレンは二体のゴーレムを操作し、攻撃と防御をこなしていた。

役割を確りと別ける事で、安定した戦闘を行うことが出来る。

「また……」

シャルルの目に映るのはアレンの中途半端な追い込み。そして見覚えがある戦い方。

レイの進行方向に、アレンは大きめの無機物を召喚して動きを操作しているが、それがどうも倒す事を一切考えていないように見えるのだ。

作戦と言われればそこまでだが、倒す事が出来るならば倒しフオロ―に回ったほうが数的有利に立ち悪いことは無い。

「常に相手の先を読む高度な思考、それを可能にする高速での召喚魔法。後で聞いてみるか……」

面影など一つも無い一人の男の姿が頭に過ぎったシャルルは、関係ないだろうが一応聞いてみようと思った。ある因縁めいた人物の事を……

m e m o r y . i o (後書き)

後一話！

memory:11 (前書き)

これで打ち止めです。

三話連続、纏めて書いて、纏めてあげる。

チヨロツト、余裕が出来たからやったけどもうこんな事しない。  
疲れた……

「いてえなっ！？速さでも力でも勝ってるのに、何で届かねえ！！」

レイは高速戦闘の代償か、肩で息をし、その隙を突かれる様にダメージを与えられていた。

しかし、レイの瞬間速度はフェイトやエリオにも匹敵するスピードを誇っており、当初は崩せる筈だったが、その全てをアレンは難無く捌ききつたのだ。

これは両チーム共に誤算だった。

「お前は直線過ぎる。スピードに付いて行けなくても、来ると解っていたれば目を瞑っていても防げるぞ？……まあ、見えているのだが」

アッサリとした回答に、レイはムキになる所か冷静さを取り戻し、その場から撤退した。

「くそっ、ここはお前に譲るぞ！お前は複数でやったほうが良さそうだ」

「チツ、冷静さを取り戻したか。挑発はしたのだが、レイはこれだから強い！自分では勝てないと悟って逃げたか」

レイの強さ、何処までも生き抜こうとする時の判断力だ。戦うのが好きで、戦闘狂のように言われる事もあるが、レイは戦闘がヒートアップするほど頭の中は冷たく冷静になっていく。戦いの中でその冷静になると言う才能はレイの最大の武器となる。

「……また歩かなければ」

自分を転送させる事も出来たが、それをすると戦闘のど真ん中であつたり、咄嗟の対処が遅れる為、あまり行なわない事になっていた。

そして状況は動く。

アインハルトが、なのはにエンゲージ。

それをなのはが退け、一時的にアインハルトが戦闘不能になり、数的有利が傾き青組が作戦を仕掛けてきた。

「2on1か……俺に割り当てはなしか……」



「そんな事無いよ？君は私が足止めなんだ」

アレンの上を飛んでいたのはなのはだった。

二対一の状況に持ち込んだ青組はヴィヴィオとスバルがノーヴェを、エリオとレイでフェイト、そしてリオとルーテシアでキャロを相手に戦いを挑んでいた。

「ホントはこの割り当てじゃなかったんだけど、レイ君が自分じゃ勝てないからって、急遽変更したんだ」

「……本当に冷静だ。これからアイツは強くなる。……だが、まだ俺のほうが強い」

「そうみたいだね。……そのゴーレムもまだ本気じゃないんでしょ？」

「それはそうです。自分が本気で力を振るうと、数的有利なんて無くなってしまふんですから……ミッドナイト、後四枚だ」

『全く時化とのおく。久しぶりのSSクラスだというのに六枚か？』

「勝つ為の戦いではないからな……さて、これだけで何分持つか」

「ふう、まさか三分ももたないとはな……、なのはさんは複数相手に戦う事に慣れすぎている」

ゴレム六機を三分も経たずに打ち破られ、数発シューターを受け既にライフは150を切っていた。危険を感じたアレンはその場から転移をし、ある建物の中に身を隠し難を逃れた。

『坊とて複数相手に戦うほうが向いておろうが。しかしこの戦い…』

「ああ、そろそろ終わるな」

見ると双方の主砲なのはじティアナが収束砲の準備を開始し、それがぶつかると、このフィールド全体に被害が及ぶだろう。

「あつ！いやがった！」

「レイか、どうした？フェイトさんは良いのか？」

「それはエリオさんに任せてきた。俺はお前を引きずり出して、戦場の中心に運ぶのが役目だ！」

建物の窓枠に立ち、アレンに向って堂々と宣言し、作戦を暴露した。

「…………お前バカか？それを俺に言ってどうする、しかもここは既にフィールドの真ん中…………中心点だぞ？あの砲撃をまともに受けに来たのか？」

「…………怖い物見たさというか…………へへッ」

本当にその砲撃がどの程度なのかを確認しに来たらしい。以前、フェイトさん等から砲撃を身体に受けた時の体験を聞いていた時、顔を輝かせていたのを思い出したアレンは溜息を付きながら

その場に腰を下ろした。

「何やって……あつ!？」

戦わずに腰を降ろしたアレンに声をかけようとして、その瞬間に現れた物に大きな声を上げた。  
アレンは自分を隠すように建造物を召喚し、その中に籠もり収束砲を防ごうとしているようだ。

「テメツ！何自分だけ隠れようとしてるんだよツ!？」

「俺はお前みたいな死にたがりとは違う。壊せる物なら壊してみる。硬度が高い物ばかり選んで困んだんだ、お前では無理だ」

「いや、悪かったって！ダメ、怖い！ちょ！あの収束見たらちょい無理!？俺も入れ」

レイは最後まで言い終わる事無く収束砲に飲み込まれていった。  
レイが最後に見たのは、防御も虚しく、アレンを守っていた物が粉砕されている光景だった。

「終わったようだな」

「ええ、引き分けと言うのは残念だったけど、皆素晴らしかったわ  
！」

「……………」

収束砲からの展開は早かった。

ほぼ全ての選手が戦闘不能。生き残った赤組はティアナ、そしてア  
インハルトの二名。

そして青組はヴィヴィオのみと言う状態で、ティアナがヴィヴィオ  
の一撃でダウン、そして最後にアインハルトの一对一から引き分け  
になってしまった。

「……………あれ？どうしたの、シャルル兄、あの子がどうかした？」

一緒に観戦していたセインがシャルルがアレンの方ばかり見ているので不審に思い尋ねていた。

「ん？いや、何でもないんだ……何でも」

最後の瞬間、シャルルは確かに見たのだ。一瞬だけだが、エリア外にいるアレンの姿を。

おそらく、タグを外しぶつかると一瞬だけをエリア外に逃れる事でも誰にも気が付かれずに、無傷でこの試合を終わらせたのだ。そんな事をする理由と戦い方を共に問い詰めなくてはいけない。

「二時間後ここに集合ね！」

その後、第二戦を迎える前に小休止として休み時間が設けられた。それぞれ思い思いの場所で身体を休め、その後の戦いに対してヤル気に漲っていた。そんな中、シャルルはアレンを探し、練習場の近くにある丘を登っていた。

「……来ると思っていました」

そこにはバリアジャケットを着たままのアレンが、シャルルを待ち構えていた。

「……君に聞きたい事があるんだ」

シャルルは少し心の中で焦っていた。ある王の名前が語られるのではないかと……

「君は……」

シャルルが言葉を重ねようとした時、アレンが先に口を開きその問いかけを塞いだ。

「貴方は真に英雄です」

「い、いや。俺はそんな器では……」

話の真意は理解できないが、咄嗟にシャルルはその言葉に対して答えていた。

「いえ、貴方は真に英雄なのです。そして英雄とは……」

言葉と同時に、シャルルに向い両手を翳した。膨大な魔力を伴いながら。

その魔力の量から、シャルルは避け様としたが後ろには訓練場があり、避けてしまうとこの魔力が彼女たちに向ってしまう。シャルルは心の中の焦りから、その事に一瞬気が付くのが遅れた。

「最後は悲惨な物が多いんですよ……」

閉じられていた瞳が開き、銀色に輝いていた。

「ガアアアアアッー!!」

防御を選択する時間も奪われたシャルルは、アレンの手に見える召喚陣から膨大な熱量を誇る炎の渦に飲み込まれていった。

「さあ、今この時より始めよう！帝王の屍の上に築く、召喚王の復活祭をッー!!」



memory:11 (後書き)

はい！可笑しな話の展開に成ってまいりました。

三巻の中に強引に話を割り込ませました。これからオリジナルに入ります。

いや、二ヶ月って大会までの時間があると聞いたら強引でも入れないとなってます。

感想ご指摘なんでも待ってます。

memory: i12 (前書き)

更新しました。

memory:12

「テメエツ！何やってんだよ！？」

爆発音に気が付き人が集まり始めた。

そこにあつた現状に、誰もが目を疑った。

「……………君がこれをやつたの？」

既にバリアジャケットに皆変わり、これをやつたと思われるアレンを油断なく見つめる。

「案外遅かつたな。……………いや、それだけ皆疲労していると言つ事が」

黒い煙を上げながら伏すシャルルとそれを見下ろすアレン。

「しかし、今から止めを刺す所だ。そこで大人しくしていて貰おう」

そう言つと地面から大量のゴーレムが現れ、アレンの姿をそこから隠す。

「くっ！なのは！」

何体ものゴーレムに行く手を阻まれ、シャルルの場所までたどり着けない。

さらに、先ほどの疲労がまだ抜け切れていないのも起因し、思うように動けないでいた。

「うんっ！スターライト……」

その場にはすでに魔力が大量に舞い、収束砲が撃てるだけの量にまで達していた。

「なのはさん……あなたの砲撃を撃たせると思っているんですか？」

「くっ！？う、後ろ！？速い、いや、これは……」

なのはは砲撃を中断し、突然後ろから現れたアレンの攻撃を受けた。

「始めて見ましたか？短距離瞬間移動を」  
ショートジャンプ

召喚系の魔法で瞬間移動は確かに存在する。しかしそれは通常、移動から転送までの時間はなにもできない時間が存在する。

「……驚いたな。その年でまさかそれが出来ちゃうなんて……」

通常 フェイズタイム と呼ばれるそれを、戦闘可能な領域まで鍛錬、調整した者を ショートジャンパー 短距離瞬間移動者 と呼ぶ。そして、アレンはまた元に居た位置に転移し戻る。

「召喚士とは、転送などのエキスパート。これも延長線ですからね。ただ、今はまだ自分のみですから、あまり使い様が無いんですよ、俺は近接苦手で……」

確かに、今の一撃をそれなりに腕の覚えが有る人間がしていれば、防ぐ事は出来なかっただろう。

しかし、それも時間の問題だと思う。

これだけ形になっていれば、そう遠くない内にそれも補う事だろう。

「ヤアッ！」

何時の間にか、一人数多に居るゴーレムの中を抜けて出てきた人物が居た。

周りからの援護を受けて、その位置まで来たのはヴィヴィオ。

アレンとゴーレムの距離はある一定以上空いていて、ヴィヴィオの攻撃を防ぐのには間に合わない。

「俺が手を出すまでも無いな……ようやくか。遅かったな」

「キヤツ!？」

しかし、ヴィヴィオの拳はアレンに届かず、その間に割り込んできた陰によって防がれ弾き飛ばされていた。

「デイン」

「ええ、すみません我が主。不意打ちから仕掛けた筈なのですが、かなりしぶとくやられましたよ」

「まあいい。これで今闘える一番の障害は片付けたな」

「不本意ではありませんが、全ては我が主の為に……。しかしさすが騎士ゼスト。それでも楽しめましたから良しとしましょう」

その言葉に、大きな動揺をする一同。

この騒ぎに、あの人物が何時までも姿を見せないと思ったら、既に戦い敗れていたのだ。

Sランクの騎士であり、シグナムとも打ち合えるほどの人間を、不意打ちとは言えこの短時間で打ち倒すこのデインと呼ばれる人間を

相手にここを切り抜けられるのか。

「そ、そんな……、パパツ!？」

ルーテシアは振り返り、戦っていたらう場所を眺める。  
そして、ここから微かに見える位置に煙が上がっている場所を確認した。

「ご安心を。我が主の命により、命までは取っていません。今はご夫人の看病を受けている頃でしょう」

「チツ、ベラベラ喋るな。……時間だ、そろそろ退くぞ」

「了解しました。我が主、召喚王アレン様」

恭しく礼をするディンにアレンは何も言わず、空を舞いヴィヴィオ達を見下ろす。

「召喚、王……?」

その名に反応するのはただ一人、アインハルトのみ。  
嘗ての記憶を持つアインハルトはその名が持つ意味を正しく理解す

るに至った。

「帝王が、都市を丸ごと壊滅させた国の……王」

「えっ！？そ、それって……」

「復讐ってこと！？」

リオヤコロナ、近くに居てその声が聞こえた者は驚き声を上げた。

「今、体力などを使いきった君たちを殲滅するのは容易い。だがそれでは余りにも……」

空を飛んでいたアレンはゴーレムの動きを止めて、話を始めた。

「故に、ここから始めよう。世界の命運を賭けたのゲームを……」

「主？それは……」

苦言を呈そうとしたディンだが、アレンの顔を見るとそのまま何も言わなくなった。



「ゲーム？」

「そう、俺はある管理外世界で陣を張る。無限召喚陣を。其処に来て君たちが俺を止められれば君たちの勝ち。だが止められねば、法の塔とその下に生きる人間を全て消す……」

「なっ！？何で！何でそんな事をつ！？」

「これは、召喚王が最強であるという事を示す戦い、そして我が一族の悲願……」

「あ……」

アインハルトはそこで、川で遊んでいた時に話したアレンを思い出した。

「陣の完成は明日のこの時間だ。管理局が動いたとしても、編成などに時間をとられ間に合わない、残されているのは君たちで俺を止める事だ」

「アレン君……、嘘、だよな？アレン君がそんな事……」

アレンが冷たく言い放った言葉に、コロナは縋りつく思いで改めて聴いていた。

「コロナ……みんな……。お前たちと過ごした日々は……悪くない物だった……。帝王の遺志を継ぐ者たちが、俺を止められるか、期待して待っている」

「待てッ！待てよッ！アレンッ！アレンーッ！！」

それだけ口にする、その場からディンを連れて転移し、姿を消した。

残されたのは僅かに息をしているシャルルと、治療を急ぐのは達。そして、アレンが消えた先を見詰める友だった者達だけだった。

memory:12 (後書き)

如何でしたでしょうか？

ちよいと強くしすぎた感はありませんが、まあ良いでしようじいねくら  
いWW

ではまた次の話で

memory・13 (前書き)

かなり久しぶりの更新となります。

お待たせしてしまいすみませんでした。

今回はかなり悩みました、てか一人キャラが可笑しくなった。人化した

何があった、俺

「このバカ者があつ！―勝手な事をしよつて、まして絶好の好機にも拘らず、止めも刺せずには帰つてくるとはな！」

「グツ！……申し訳ありません、大爺様」

目の前に鎮座する生体ポッドから魔力弾が放たれ、アレンの体を叩きのめしていく。

数時間にも及ぶ間、絶え間なくアレンを傷つける生体ポッドの中には、脳が浮かんでいた。

そう、最高評議会達と同じような姿で、それは存在していた。

「まあよい。術式発動まで、あと数時間。何があつても死守し、奴が作り上げた平和など粉々に砕いてしまえ。それで我ら一族の悲願は達成される」

「……はっ」

アレンはそのまま扉から外に出る。

大きな城、そのバルコニーのような場所に立ち、そこから広がる自然に目を向けた。

「主、準備が整いました」

「デインか、もうすぐ彼らが来る。術式完成までの間足止めをしろ」

「我が主の命とあれば、この命付き果てようとも……」

「……術式発動まで、あと少し……。俺を、止めてみる……」

(主……)

拾われた恩と彼の力に惹かれここまで仕えてきたデイン。

彼はこれが、主にとって良くない事と知りながら、戦う事しかできない自分に苛立ちを覚えた。

言葉を尽くしても聞き入れてはもらえず、ただあの脳髓の言いがままに、その力を奮っている姿に心を痛めていた。

(後は、あの子たちだけ……。唯一、主の心を動かした彼らに……)

首に掛かるチョーカー型のデバイスを握りしめた。

(それまでは、主には誰であろうと、指一本触れさせない)

「ダメっ、火傷の範囲が大き過ぎる。これ以上はここでの治療は難しいわ」

宿泊ロッジの簡易医療施設にて、シャルルの治療を行っていた面々だが、その怪我の大きさに、焦りを浮かべ始めていた。此処にはいないが、外で子供達も心配しているだろう。

「今からだど、臨時航行船では間に合いそうにない。でも死なせない……っ。絶対に！」

治療魔法をかけ続けるが、それもあまり意味を成さず、容体は刻一刻と悪くなっていた。

「誰かつ……誰かこの人を、助けて……」

誰が言ったか解らないその呟き、静かな病室に悲しく響くのみのはずだった。

「……このままじゃ……っ！なに？何かくる！？」

いち早く異変に気が付いたのは、召喚魔法を駆使するルーテシアだった。

自分達の、それもシャルルのすぐ近くにピンポイントで転移する反応があった。

「やれやれ、初めてのこの姿でのお披露目であるのに、こんな緊急事態だなんて、マスターはいつでもクライマックスですね」

「だ、誰……？」

その場に居る人間の警戒心が跳ね上がった。

突如、現れたもそうだが、その姿が、黒髪のリインだったからだ。

「なのはさん、それにフェイトさんも。お久しぶりです、いえ、この姿では初めましてでしたっけ。私、ネイキッド改め、ネリアと申します」



「「へ？」」

「おっと、今はのんびり自己紹介をしている場合ではなさそうですね。では……ユニゾン！」

ネイキッド、それはシャルルのデバイスの名前。

しかし、それはインテリジェントデバイスであった筈だが、その姿は人型であり、融合騎である事を示すかのように、目の前で眠るシャルルとユニゾンを行った。

ふう……、これで命には問題無いでしょう。では、皆様、マスターがこのような事態に陥った訳をお聞かせください

ネイキッド改め、ネリアはユニゾンした状態でなのは達に念話を送ってきた。

質問に答えるように、すべてを語って聞かせ、聞き終えたネリアはため息を零した。

まさかマスターも、こんなに早く保険が効くとは思っていなかったでしょうね

「保険？そう言えば、ネイキッド、じゃなくてネリアは何でここに

これたの？さっき応援要請したけど、幾らなんでも早すぎるよね？」

それは私が融合騎に生まれ変わった事と関係します。マスターは大将になった事で、自身が管理局におけるもつとも狙われる人物であるという事を正確に理解し、自分が瀕死状態に陥った事を想定し、それに備えていました

シャルルは、ネリアを自分専用の融合機に作り替え、ユニゾンする事で生命維持能力を上げる調整を施していた。

そして、マスターが瀕死に陥った時、私が近くに転移する様に生体リンクでも繋がっています。……まあ、そのおかげで、私は戦闘では全く役に立たないようにしてしまったのですがね

153

このまま安静にして居れば回復するが、それも数日と言う時間が必要であるらしい。

緊急事態の今、彼の回復を待っている時間はなさそうである。

それで皆さんは、これから向かわれるのですか？

「うん、そのつもり。このままだと、ミッドチルダが大変な事になっちゃうからね。管理局の動きと合わせて」

応援は来ませんよ？私が止めましたから

「えええつ！？敵の詳細は解らないけど、これはかなり大きな事件だよ。応援なしに解決できるとは……」

『ああ、聞こえるかい？その場に居るのは誰かな？』

「え！シャル君なの！？大丈夫！？」

その部屋に居る人間に向けてシャルルの念話が送られた。  
今まで死の淵に立たされていた人間とは思えないほど、軽い言葉。  
目を醒ましていないが、意識だけが、ユニゾンした事で回復していた。

『まあ、死にそうではあるけども、ネリアが来てくれたからね。これで一応は死なずにすむよ』

「心配したんだからね！」

『悪かったね。……それよりも、今回の事件についてだ。この件は、あまり大事にしたいくない』

「それはできないよ、シャル。既に殺人未遂、傷害、危険魔法使用以外にもまだ罪状があるの。これを全部は……」

フエイトが法に基づいた意見をシャルルに話し、シャルルもそれに賛成する。

『いや、全てを無くせ、なんて言わないよ。罪は償ってもらおう。ただ、それもこれ以上大事にすると、彼の将来その物が無くなってしまうじゃないか』

簡単な話、この事件はテロである。

そんな事件を起こした人物にその先の人生など、幸せな物にはならないだろう。

『何か事情があれば、情状酌量の余地があるしね』

「シャルルさんは……どうしたいんですか？」

何かを考えるように、無言な間が緊張感を持たせる。そして、何かを決めたシャルルが口を開いた。

『今いるメンバーでこの事件を解決してくれ』

「はあはあはあ………ただだ。俺はまだ………諦めねえぞ!!」

『マスター………、もうそろそろ、休みましようよ。もう何時間もぶつ通してカートリッジを使いまくってるじゃないですか』

練習場のレイアー建造物を目の前に、レイはアレンが裏切った現場で何もできなかった自分を呪い、体をいじめ続けていた。練習会で互角に戦っていたアレンに手加減されていた事実には、悔しくて堪らなかった。

「あいつは連れ戻す！何があっても！そんなでもって、全力で頭どつく!!」

『その諦めない姿勢！友達思いなマスターの姿、素敵です！！……あいつが相手って言うのが気に食わないけど……』

「とっ、そろそろマジで疲れた。ちょっと休憩な」

尻餅をつきながら、デバイスを解除するレイ。

全身を汗でぬらしながら、目の前の自分が壊した建築物を眺める。

何かが貫いた後があり、その貫いた後には罅なども一切見当たらず、その数は行く百にも及んでいた。

「待ってるよ、俺一人だって、お前の所に行くからな！」

memory・13 (後書き)

ネイキッドが可笑しくなった。

何で？可笑しいな、こんなはずじゃ……

レイ君の武器がちょっと特殊になった。あれ？第二形態は剣だった

筈が……

何があった、俺。最近迷走状態のぱむぐんでした。

memory:14(前書き)

やっと書けました。



やる事は決まった。

今いるメンバーでアレンを止める。子供達もそれに賛同した。

いや、むしろ彼らが中心になって話を進める時すらある。

詳しい説明もしていないが、彼らにも解っているのだろう、それが唯一また友達としてアレンと共に過ごす方法だと言う事を。

『と言う訳で、作戦の説明をするで?』

「ちょっと待ってくれないかな?」

フェイトが挙手し、その場で苦笑いを浮かべていた。

『なんや?急がんといかん時に……』

「いや、はやてちゃんが、さも当然とばかりに、作戦会議に参加しているからだと思っよ?」

『ああ、そういう事か。それならな、ネリアが知らせてくれたんや。今からやと私らも間に合わんし、それ以外にできる事言ったら私にはこれしかない思ってな』

シャルルがこのような事態に陥った時、ネリアはすぐにはやてに連絡を取っていた。  
自分の転移機能が作動する時とは即ち、シャルルが重傷を負った時である。

ネリアはシャルルの代わりに事件解決までの作戦を提示できる人物を確保していたのだ。

『あ、でもな。シグナムはそろそろそつちに合流できるらしいで？』

「シグナムが来るの？」

「そや、仕事がちょうど終わって帰ってくる途中に今の連絡があった、近くにいたシグナムが応援に駆け付ける言うてな」

頼もしい援軍。

一対一の戦いを得意とする騎士のシグナムは相手に騎士がいる状態で、かなり助かるかもしれない。

『作戦が開始する頃には合流できるやろ。さて、そろそろ本格的に決めてこか』

先程までのふざけた雰囲気は消え去り、仕事モードに切り替わった。それはなのはやフェイト達も同様でそれぞれ真剣な面持ちだ。

『まず、これが敵の拠点や、管理外世界に大きな城があるだけで、それ以外は自然が広がった未開の世界。その城を中心とした魔法陣を現在構築中で、かなり大掛かりや。これならミッドを攻め落とす言うのもあながち間違いや無さそうやな』

モニターに移されたのは管理外世界のアレンがいる城の周辺。

その周辺にはアレンが模擬試合の時に使って居た人形が大地を埋め尽くす勢いで存在していた。

「凄い数だね。城の中に侵入するだけでかなり時間がかかりそうだ……」

「そうですね。でも、それよりも目を引くのはあの召喚獣だよな。……あれはキャロのボルテール以上ないかな？」

スバルが示した先には城の横に鎮座する灰色の狼がいた。それもただの狼では無く、その大きさがキャロが使役する真竜ボルテール以上の巨体だった。

「そうみたいですな。こうなると、私たちはここであれの足止めをしなくちゃいけませんね」

キャロはルーテシアに目配せすると、それを受けたルーテシアもそれに頷いた。

『それしかないやろうな。それに二人の護衛でエリオ、なのはちゃんそれとフェイトちゃんにも外で戦っていて貰わないかん。』

城に突入するんは、屋内戦で機動力に優れたスバル、ノーヴェに、現場指揮にティア、それと子供達に騎士を相手して貰う為にシグナム。

手っ取り早い方法なら、セインが単独先行して、魔法陣の基盤を壊しに行つて貰えればええんやけど、流石にそこには何かあるやろうから、一人は却下やな』

「綱渡りだね。時間が無いからって言つて外の戦鬪が疎かになつても城の中に追いかけて苦戦して時間切れ、中の戦力が足りなくても間に合わなくて時間切れ。相手はただ待っていれば良いだけに、この配置で正解なのか解らない」

短期決戦で全戦力を城に突入、と言うものもあるが、流石にそんな作戦が通じる訳無いし、そもそもあの狼が鎮座する限り、容易に中に入れないだろう。

あれがそう容易く倒せる訳無いのだから、まずは狼を引き剥がす所から始めなくてはならない。

『作戦と呼べるほど、策を弄する時間も無い。正面から迎え撃たなあかんやろな』

後は現場の人間に委ねられる。  
皆一様に決意を胸に戦いの場に赴く。

魔法陣完成まで……あと、三時間四十分……

「モニターで見るよりも大きいね」

「ええ、でも私達であれをどうにかしないと……」

そこは広大な自然が広がる管理外世界。

今その地に足を踏み入れた彼女達は、あまりの大きさに一瞬呆然とし、キャロとルーテシアは二人で手を握り合い、顔を見合わせて頷き、揃って詠唱を始めた。

「来てッ！ボルテールッ！！」

「究極召喚！白天王ッ！！」

二人を中心に大きな魔法陣が形成されていく。そして、そこから黒と白の異形が姿を現す。

「いつ見ても凄いねえ。ルーお嬢様とキャロの召喚は……」

「やはり近くで見ると凄まじいな。……しかし、相手があれでは、これを見ても安心できないな」

セインが仰け反りながらため息を零し、先程合流したシグナムが城の方を見て、険しい表情を作った。城の横で待機している狼はお座り状態で、一見すると可愛らしくも見えるが、大きさが大きさにだけ恐怖の方が圧倒的だ。

「それじゃ、みんな！作戦開始だよ！」

なのはの号令のもと、彼女達は動き出した。

「……デイン、彼女達が来たぞ。配置に付け」

「解っております我が主。……しかし、敵の中に騎士がおりますので、私が抜かれる事があるかもしれませんが」

目にかけているモノクルを弄りながら、戦闘が始まった外を眺めていた。

「構わないさ、目的は時間稼ぎのみ。騎士はあまり得意ではないから、シグナムさんを抑えてくれれば、数名程度は抜けても構わない。残りは俺がやる」

アレンには誰がここまで来るのかが、大体予想できていた。その為に、高い魔力を使って狼王・フェリオンを呼び、外に戦力が集まるように調整までしたのだ。

「城の中にも多数の人形を配置している。そこでも何人が脱落する





memory:14 (後書き)

……あれだ。アレン君が異常な強さになってきた。  
でもさ、キャロとルーテシアがいるから、小さいのいっぱい呼んで  
も、ガジェットとの二の舞で一瞬でボンしそうだったんだよね。  
だから、その辺はあまり気にしないでください。  
人形は燃費が良い、と思えば大丈夫！……きっと

## memory・15 (前書き)

お久しぶりです。

なかなか書ける環境では無かったので、かなり遅くなりました。

納得いくか解りませんが、どうぞお楽しみください。

「まったくツ！B級映画でも見てる気分だよ！なんだあの怪獣大戦争はっ！」

後ろで地響きを起こしながら戦う三匹の巨大な影。  
それを振り返りながら、走り抜けていたレイが口にした。

「ホント、凄いな。アレンってばあんなまで呼べたんだ……」

レイの言葉に反応して、リオが感心したのか、呆れているのか解らない声を出した。

「振り返るなっ！今は時間が惜しい。今は少しでも目の前に人形を片づけて前に進め！」

「おらあ！餓鬼どもっ！モタモタすんなよ！」

シグナムの喝と、その隣で飛ぶ融合騎アギトからの声が響く。  
その声にビビりながら、今度は真面目に目の前に広がる敵の人形に飛び掛かる。  
それぞれ危なげ無く道を作っていく。

レイは首を捻り、この弱い敵に対して考えていた。訓練の時、二体で手一杯になっていたのに、今はまるで手応えを感じない。

まるで中に誘い込まれているかのような錯覚に陥る。

「何かの誘いか？……だとしてもッ！それも全部貫くのみだぜっ！」

実際の所は、アレンはフェリオンの制御で今はそちらに気を向けていないだけなのだが、最初から城に入れてしまうことも計算の内であつた為という理由もある。

なので初めから、城に続く道に配置してあるのは、まったく魔力の籠っていない紙屑同然なのだ。

そうこうして居る内に城の城門が見えてくる。

しっかりと閉じられた城門に向かい、セインが先行し、扉を開ける。戦闘能力は、この場にいる者の中で最下級だが、その特殊な力は大いにこの現場でも役に立っていた。

城門が開き、シグナムを先頭に中に侵入していく面々。

「……………っ！？止まれッ！」

城門を潜り、しばらく進んだ所に大きなホールのような場所にたどり着いた時、シグナムが全体に静止をかけた。

怪訝な顔をしてホールを眺める年少組達。

しかし、大人達は、シグナムの静止で、直ぐにこの場に漂う空気に気が付いた。

それは殺気。

静かに揺蕩う、空気に自然に溶け込ませるかのようなその気配の消し方は、熟練の騎士のものだった。気が付かずこの場を進もうものならば、次の瞬間に、首を刎ねられて居ても可笑しくない。

「出て来い。私に奇襲は効かないぞ」

しばらく沈黙が続いたが、やがて観念したかのように姿を見せる影。

「やれやれ。ゼスト殿の時は上手く行ったのですがね」

「貴様の事は聞いている。隠れるのが得意らしいが、知っていれば対処のしようもある」

「そうですね。ならばここは、この蒼々の騎兵デインがお相手しましょう」

姿を見せた男は、いかにもな執事服に身を包み、モノクルを着けている赤毛の男デインだった。

その手には一振りの槍とが握られ、すでに戦闘態勢を整えていた。シグナムに油断はない、相手はゼストを倒すほどの手練れ。

「お前たちは先に行け！」

目を離さないようにしながら、後ろにいる全員に先を促す。

「えっ！でも、シグナムさん一人残しては……」

「あたしも居るってえの！！」

「何度も言わせるな、今は時間がない。こいつ一人に時間を割いている暇はない」

最初から分かっていた事だ。

相手の騎士が出てきたとき、相手をするのはシグナムだと。

一人一殺位の気持ちで行かなければ、この現状を進める事は出来ないのだから。

「ほら、あんた達、行くわよ」

年少組は後ろ髪を引かれる思いでその場から離れていく。

ディンはそれを追わない。追えない。

シグナムとの、睨み合いが続く。やがてシグナムとディンを置いて誰も見えなくなっていた。

「追わなくて良かったのか？」

「いやいや、そんな獰猛な目をしてらして何を言ってるのかと……。それに、私としても貴女との手合わせは望む所ですね」

ずれていたモノクルを正し、微笑みを浮かべていた。

「一対一で臨みたかったが、今は奴らの後を追うことが優先だ。行くぞ、アギト」

「合点ッ！旦那の仇、しっかり取らせて貰うぜッ！」

「『ユニゾンッ！』」

ユニゾンにより、シグナムの姿が変化する。

その体から溢れる魔力が、炎となって迸る。

その姿を見たデインは恐怖など一切感じていない。それどころか、これから始まる戦いに心躍らせているようだった。

戦闘準備を整えた両者が、それぞれの武器を持ち構える。

「さあ、始めましょう。我が名は『蒼々の騎兵デイン』。一手お手

合わせ願いますッ！」

デインの手に持つ槍から、青い焰が吹き上げる。

そして彼の足元に広がる蒼い魔法陣。これが、蒼々と呼ばれる理由の一つ。

言葉を言い終わると同時に突進するように踏み込んでくるデイン、それを横に回転するように回避し、その反動を使い背後からの剣劇を見舞う。デインはそれを槍を立て防ぐと、石突を使い下から振り上げる。

それを僅かに後方にバックステップでシグナムは避ける。

そして、シグナムはカ一杯剣でその槍を叩き付け、デインは堪らず、後方へ流される。

「一気に決めるぞっ！」

『おっしやあーッ！』

僅かに出来た隙。

そこに自分が信じる一撃を発動させる。

「紫電ッ！！！」

『一閃ッ！！』

発動した技、そのままデインの体に吸い込まれていく。



しかし、不意に感じる悪寒。シグナムはその感覚を信じ、一步踏み止まる。

だが、まだ剣は届く位置、これで戦闘不能には出来そうにないが、それでも大きなダメージを与えられるだろう。そして、狙い通り、シグナムの剣はデインの体に直撃し、壁にまで吹き飛ばし、大きな音をたて、壁に衝突していた。

と、そこでシグナムの眼前を通り過ぎる槍の影。

体には当たらず、シグナムの髪を少しだけ切り落とす。何が起こったのかを、シグナムを攻撃当たる一瞬前に気が付いた。

「まさか、防御を捨てるはな……」

デインは、防ぐのにまだ間に合う筈だったにも拘らず、その槍を防御に回さず、地面に突き大きく撓らせていた。

その結果、シグナムが攻撃し、デインの手から離れた瞬間に、その槍は反動でシグナムの顔に目掛けて飛んで行ったのである。

もし、もう一步踏み込んでいたら、両者共に倒れていたかもしれない。

「流石と申しましょうか。掠りもしないとは思いませんでした」

粉塵が舞い散る中、立ち上がり、こちらに向かって歩いてくる。

執事服はよれてボロボロ、体も所々傷だらけである。だが、背筋を伸ばし片手を後ろに回して、モノクルを直す姿からは、いまだ余裕が見て取れる。

聞いていた話と少し違う事に、シグナムは少しの違和感を覚えた。

「貴様……、手を抜いているな」

ゼストから教えられた彼の戦い方は、もつと速い筈である。それが誇張表現されているかもしれないが、ゼストはスピードはフエイトに迫ると言わしめて、これだけのはずがない。

「手を抜いているなど滅相もない。ただ、槍を一本しか持たない私では、あなたとこれ以上激しい戦いを演じられそうにないですね」

飛んで行った槍を回収し、シグナムと向き直る。

「それと、おそらくゼスト殿から聞いていた話との違いに戸惑っているからその言葉が出たのでしょうか、私はそれほどスピードは持ち合わせていませんよ……」

シグナムの目の前で、ディンの姿が分裂を開始する。

「雇気楼はご存知ですか？それは幻影。私は炎と幻影を使い敵を翻弄する。最初に判断能力を奪われたゼスト殿では、これを突破する事が出来なかった。それだけ。あなたにはこれでも通じそうにありませんがね」

いつも位置を気にしていたモノクルを、今度は外して空いていた手に握りしめた。

「蒼々後二つの意味、あなたにお見せしましょう。……セツトアップ」

現れたのは色違いの同じ槍。

「これは……」

「青い焰、蒼い魔法陣で蒼々。そして、これがもう一つの意味、二槍で双槍。任務で敵を残らず屠る事から、評議会からは『葬送』のデインなどと呼ばれていました」

「評議会？」

「昔の名、気になるのならばお教えしましょう」

そう言ったデインは先ほどとは全く違う構えで、堂々と名乗りを上げた。

「私は元、時空管理局・最高評議会直属の特務部隊所属、部隊長。葬送の騎兵デイン」。烈火の将よ、火力を最大限に使えないこの場所では、ユニゾンで上がった反応速度と己の武技が物を言う。さあ、ここからが本当の舞闘です」

その顔は、どこまでもこの戦いを楽しんでいるように見えた。自然、シグナムも口元に笑みが毀れる。今が大変なのことも、のんびりしていられない事も理解しているが、それと同時に、ベルカの騎士として今はこの戦いに全てをぶつけたかった。

「行くぞっ!」

騎士と騎士。赤と青。今二つがぶつかり合った。

memory:15 (後書き)

今回は騎士の対決。伏線も何もありません、デインの所属などを出しました。

JS事件の時には既に部隊は解体していたと言う脳内設定あり。それは何かの機会に書ければなあ、と思います。

これからまた、色々やらなければならぬ事があるので、更新や感想は返せないかもしれませんが、これからも生暖かく見守っていただきます

「シグナムさん大丈夫かな？」

「そう？私たちはむしろあの男の人が心配よ」

未だ城を駆け抜けながら、置いてきたシグナムの心配をしている子供たち。

それとは逆にむしろ相手をしている男に同情をしている元六課の面々では温度差が酷く違っているようだ。

信頼度の違いと言うよりも、その戦いを見た事が無い者によってその反応が違うのだ。

「と、あんた達ッ、話している暇なくなりそうよッ！来た、散開してッ！」

ティアナの言葉でその場から散開する。

そして元々彼等が立っていた位置に、大きな塊が着弾し、大きな土煙を上げていた。

それはよく目を凝らすと、大きな腕の塊のようだった。

「これって、ゴーレム？」

「アイツ、あのサイズだけじゃなかったのかッ!？」

「次来たよッ！」

その声の後に、数体の巨体ゴーレムから幾度も飛来する腕の砲弾。そのサイズはコロナのゴーレムの腕と同じであり、その必殺の一撃

が幾度も飛来する様は悪夢そのものだ。  
何とか回避する彼らだが、徐々にその逃げ場が減って来ていた。

「うオオオオおおおお      ツー！」

立ち並ぶ岩の塊をスバルがその腕を持つて粉碎していく。  
振動破碎。

連打出来る物ではないが、相性としては無機物である其れにとって  
は良いと言える。

「あんたらは先に行きなさい！ここはあたしたちがどうにかするか  
ら」

スバルと並び、巨体のゴーレムに向かうのはティアナとセイン。  
セインにしても、その能力は相手が無機物であると、大幅にその行  
動の選択肢が増える。

それを司令塔としてティアナが残り指示する事でその戦力の安心感  
が増す。

「……解りました。ここは任せます。行きましょう」

アインハルトが率先し、その場にいる者たちを先導していく。  
他の者も時間が無い事を理解できているのだらう、心配そうに何度  
か振り返りながらも、その足は駆けていた。

「友達自分達で。私たちの仕事はあの子たちをそこまで連れる事」

「この城の構造から言って、玉座も直ぐだし、これだけ力を散らせ  
れば、あの子たちでもどうにかなるよね？」

「まあ、心配ならこれを早く片付ければ良いだけでしょ」

そして、スバルとノーヴェが前衛に出、ティアナが後衛に位置付く。セインはその身を地面に潜って隠し、ティアナの指示の下、彼女たちの援護に回る。

そびえ立つ巨大なゴーレムたち。

その数は十体、これだけでも並みの術者ならば維持させるだけでも精一杯になるだろう。

だが、感じる魔力は一色で好き勝手に動き回る、つまりこれだけの数を一人で制御していると言う事だ。

「これだから天才は……。さあ、行くわよっ！」

「アレンっ！！ここまで来たぞっ！！」

玉座に座り、モニターに視線をやっていたアレンは、その声に反応しそちらに視線をやる。

先頭にレイ、アインハルトが息を少しばかり荒げながら立ち、そのすぐ後ろにヴィヴィオにコロナ、リオが居た。

彼らは武装を既に展開しており、その眼は焦りからか、幾分か厳しいモノになっていた。



「来たか、待っていたよ。……思っていたよりも脱落者はいないな。喜ぶべきか、悲しむべきか……」

「ねえ、アレン君。一緒に帰ろう？こんな事間違ってるよっ！」

「そうだよ！このままだと、アレン君が今まで通り普通に暮らしていけないッ！」

それは友を思つての彼女たちからの言葉。

だが、それは彼には届かない。

「普通とはなんだ？お前たちにとっての普通が、俺にとっても普通である等と思うな。俺にとつての普通の暮らしは、苦しみに彩られているッ！……お前たちと共にあった時が、どれほど俺にとつて輝いていたか、どれほどお前たちが輝いて見えたか……」

「だったら。だったら一緒に帰ろうよ！その光の中には、アレン君が居なきゃいけないんだからっ！」

「そうだよ、私たちは友達なんだ！その光はアレンが居なきゃ、くすんじゃうよ！」

「貴方は帰るべきです。古い妄執に囚われず、あなたの言う輝いている中に戻ればいい」

次々に紡がれる友だった者たちの発言に、心を揺らしながら、最後に放たれたアインハルトの発言に、アレンは目を大きく見開いた。今の台詞を彼女が言った事に、アレンはとてつもない衝撃を受けた。

「……古い妄執とは。それを君が言うのか？ 霸王イングヴァルドの子孫よ」

軽い怒気を帯びながら、静かに告げるアレンに、アインハルトは冷静な物腰で返しの台詞を放つ。

「私は私の意思で、彼の遺志を継ぎ、その願いを叶える為に居ます。あなたのような強迫観念での行動とは違う」

その言葉に、アレンはしばらく何かを考えていたようだが、直ぐにその顔を嘲笑へと変えた。

「自分の意思、自由意思か……。なるほど、それが俺と君の決定的な違いと言う訳だ。俺には自由意志などない。ただ昔の復讐を果たす為だけに育てられ、その為だけにこの場に立っている。俺は人形だからな」

人形と言う部分に明らかに諦めの色が見て取れた。

それが気に入らない。レイは親友のそんな表情が我慢ならず、大きく息を吸い込んで言葉と共に吐き出した。

「細かい事は解らない！ けどッ！俺はお前を止める。そこで、お前の悩みを全部俺がぶち抜くッ！」

その言葉に反応し、彼女たちもそれぞれ構える。

相手はこれだけの戦力をたった一人でそろえた化け物級。

油断など最初から存在しない。

「……時間も後僅か、そんな中でやれると言うのならばやって見ろッ！俺を打倒した後、この魔方陣の中心に据えている水晶を壊し停

止させて見るッ」

浮遊し始めるアレン。

その彼の背後に、巨大な魔方陣が現れ、中心に何かが安置されていた。

「わが名は召喚王ッ！無尽蔵に召喚を行う最強の王だ！その力の一端、思う存分味わうがいいッ！」

手を一振りすると、宙に浮く彼を中心に円状に無機物の巨大な影が姿を現した。

使役魔法によつて襲うのではなく、絶対的な質量をもつて押しつぶすのが今の彼の戦い。

今現在で彼が行えるのはこの燃費の良い無機物召喚による戦いのみ。戦法も戦略も関係なく、力による真正面からの力押しだ。

（フェリオンが苦戦しているか……、チツ戦いの幅が少ないな）

その原因は、戦力を拡散させるために、大きく力をそちらに割いてしまった為と、思いの外、フェリオンが苦戦し、多くの魔力を食われているためだ。

彼に最終的な目的は時間を稼ぐ事だったが為に、その戦略は正しく、だが、それ故に今この場での選択の幅を狭める事となった。

だが、それでも。

「君たちでは俺に届かないと言う事、思い知らせてやるっ……」

戦いに対する経験、知識、その全てでアレンは勝利、さらに自分の領域に立っている。

ここは彼の為の玉座。

その玉座から叩き落とせるかは、彼らの奮闘に掛っている。

「行くぞっ！みんなッ！！」

それはこの世の光景とは思えないほど、壮絶な獣の戦い。

天を突く巨体でぶつかり合う三体の獣は、主の指示に従って、その暴力を振るい敵を屠るために死力を尽くしている。

それぞれ傷が見られ、決着をつけるのもまじかである事を示していた。

「ヴォルテールッ！頑張っつてっ！」

「白天王、ここからが本番だよっ！」

二人の少女は、そのうちの二体の肩に乗りながら、その暴力を制御していた。

これほどの力を持つ者を制御する為には相当に力を消費するのか、その額には汗を滲ませている。

彼女たちが戦う周りで、幾条もの光が大地に蠢くゴーレムを屠る姿があった。

桃色と金色の輝きは、ゴーレムが城に入らないように撃退しながら、さらにその数を減らすべく、全力で当たっていた。

「なのは、大丈夫？最近仕事あまりしてなかったから鈍ってない？」

「フェイトちゃんこそ、デスクワークばかりで体力落ちてるでしょ」

二人はかる口を叩き、笑いながら魔法を発動させていく。

二人は、久しぶりに共に戦場で立っている事が嬉しかった。

油断できるような状況では無い事は解っているが、それでも久しく感じる互いの魔法の輝きが心を震わせる。

「フエイトちゃん、少しお願いッ!」

「うん、解ったッ!」

なのはが動きを止め、己の最大の魔法を発動させる準備を始める。この場合は、三体の規格外の存在がまき散らした、凄まじい量の魔力が舞っている。

それを限界まで集め放つため、なのははいつも以上に時間を掛ける。フエイトにもそれが解っているのか、なのはの危険性を理解し群がろうとするゴーレムを次々となぎ倒していく。

五分ほどだろうか。

長時間貯めた魔力になのはは限界を感じながら、苦しそうな表情を浮かべそれでも制御し続ける。

それはあたかも、地平線上に見える太陽の輝きにも似ていた。

「スター、ライト……」

なのはの言霊と共に、その光が一瞬脈動する。

「ブレイカアアアア

ッ!」

限界まで溜められた収束砲は進路上に居るゴーレムを一瞬で塵とかし、なのはがそれを扇状に動かし、被害を広げていく。

それを放ち終わつたなのははレイジングハートを杖にして辛うじて倒れるのを防いでいる状態だった。

限界以上の魔法を使った一時的な酔いの様な物だが、それをするだけの価値があつた一撃だ。

見渡すと、そこには何もなかった。ただの荒野が広がり、ゴーレムが埋め尽くす前の姿を見せていた。

「ふう……こっちは終わったね……」

「うん、どうする？子供たちを追いかけてようか」

「ごめん、私無理だ。ちょっと動けそうにないよ」

「そっか……。そうしたら、追いかけても追いつけそうにないし、少し様子見だね」

こうして方にも及ぶゴーレムの群れは、二人の手によってその存在を消す事となった。

「流石、なのはさん達ね。……私たちもそろそろ限界だし、こっから決めましょう、キャロツ！」

「うん、解った。行くよツルちゃん！……ヴォルテールッ！」

二人の指示に従って二体は力を溜め始める。その集まりつつある力を感じたのか、対する狼はそれを止める為に

襲うと言う事はせず、跳躍し距離を取った。

『ウオオオオオオオオー！ー！ンツ！ー！』

突然遠吠えを初める。

そして、そのまま身を低くし、二体に倣うように力を溜め始めた。

それは獣の王が、相手を敵と認め正面からの戦いを望んだ証。

ぎらついた獣の目だが、勝つ、と言う確かな意思がその傷ついた双眸からうかがえる。

「あの子の為に、ここまで必死になって……」

「……良い子だ。あの子の為に勝ちたいんだね。でも勝つのは……」

先に放ったのはフェリオン。

その口から、膨大な力の渦が吐き出される。

その一撃は都市を丸ごと飲み込み、甚大な被害を与えるに等しい一撃。

これこそ、アレンの最大戦力にして、最大火力。

かつてのベルカ時代に生きていれば、おそらく負ける事の無かった強大な存在。

その存在の一撃を前にして、彼女たちは言い放つ。

「私達なんだからああああ　　！」

二体同時に放たれる破壊の力。

それは混ざり高まり、一筋の光線となってぶつかった。

決戦兵器同士のぶつかり合いの様に、衝撃を当たりにぶちまけ、中心地などは地面がガラスのように溶けだしていた。

それでも止まらない力の衝突。



「まだまだ、あの子たちが頑張ってるんだからッ！」

「お姉さんが負けてられないよねッ！」

二人は頷き合い、二体の制御を手放した。

もっと力を、あれを超える力を。

二人は制御の代わりに自身の魔力でそれぞれの力を高めた。

「はああああアアアアあ

ッ！！！！」

その高まった力を放出するように、二体の力をさらに増す。

徐々に、徐々にだがそれはフェリオンを押し始めた。

ついに、その力に耐えかね、砲撃が掻き消えた。

その光線がフェリオンを捉えたと同時にキャロとルーテシアの魔力が底を尽き、強制的に二人の召喚獣は送還されていった。

フェリオンはその巨体を横たえながら、首だけを自身を破った召喚者に向ける。

『見事。我、堪能。素晴らしき戦い、礼言っ』

それは拙く片言ながらも、人間の言語だった。

それに驚き、まるで返事を返せなかったが、フェリオンの下に巨大な魔方阵が展開され、飲み込まれ始めた。

『主、済まぬ。我敗北……』

それは送還の魔法。

『次こそ、主、共に駆ける事祈る』

フェリオンはそれだけ口にする、完全にその姿を消した。

二人は何もいなくなった荒野で尻餅を付き、疲れよりも勝利に酔っていた。

そして、アレンがフェリオンと居たらと考えると、二人して身震いする。

召喚獣とは主と共にあってこそ真価を發揮する。

召喚獣単体でこれだけ苦戦したのだから、両者が揃った時などは勝算すら浮かばない。

あれを倒すと本格的に考えた場合は、百人以上の精鋭を揃えなければならぬだろう。

(……でも、あれだけ慕われてる所見ちゃうと、興味湧くな……)

召喚者と召喚獣との関係でこれほど恵まれている例は余り見ない。

それも、小型や中型ではなく、使役そのものが困難な大型獣の一級品でと言うのは皆無に等しい。

(私とキャラも、どっちかと言うと見守られているっていうのが近いしなあ……)

デバイスの知識を持っている優等生で『友達の友達』と言う認識から、ちよつとだけ、個人的に興味が湧いたルーテシアは心の中で祈る。

(もっとお話ししたいし、早く帰って来ないかなあ……)

それはまだ気付く事の無い、淡い淡い最初の気持ち。

「ハアアアアアツ ツ!」「」

剣と槍がぶつかり合う。

卓越した技量を持つ騎士同士の戦い。

武技の限りを打ち合う両者の顔には笑みが毀れていた。

上から叩き付けるように振り下ろされる槍を後ろに下がる事で避け、それを追うようにもう一方の槍が突付けられ、それを受け流したと思っただら、既に引き戻されていた片方の槍が横薙ぎに襲ってきた。それを大きく横に飛ぶことで掠りながらも回避したシグナムはその場で息を整える。

「可笑しな槍捌きだ。長槍を片手で扱うだけでも凄まじい膂力だと思っただが、それを手足のように扱って見せるか。……変幻自在、私はお前のような騎士と戦った事は無い」

「お褒めに預かり恐悦至極。しかし、私としてもここまで長く持ち堪えられた事が無かったので少々驚愕しています。流石は烈火の将の二つ名を持つだけは有ります」

「ふっ、お前のような騎士にそう言われると悪い気はしないな。だが……いや、だからこそお前がこのような事をしているのが信じられない。お前ならば、奴の事を正しく導けたはずだ」

シグナムの言葉で、デインは動きを止めた。

今まで構えを解く事が無かった彼が、その腕を下げ無防備に体を晒した。

「貴女なら解るでしょう？いや、解る筈だ。貴女は闇の書事件の時、苦しみもがく主の背を見ながら歯を食いしばる無力な自分を知った筈……。助けたいと願いながら、しかし何もできない無力な自分をッ！」

言うが早いか突撃をしたデインの槍を真正面から受け止めた。それを強引に逸らし、返しの刃で切る。

それを片側の槍で受け切り、槍にとって不利なはずの密着状態にも拘らず、そんな事は関係無いとばかりにその距離で戦い続ける。

「導く！？簡単に言ってくれるッ！私があの方を救いたいと思わなかったとでも思ったかッ！！」

冷静沈着を絵に描いた様な男が、その時ばかりは己の激情に任せて槍を振るう。

槍よりも剣の間合いであるにも拘らず、シグナムはその気迫に押され攻め込めずにいた。

「あの方の生とは！ただ人形のように言われた事をやらねばならぬ生だったッ！！」

感情に任せて尚、その武技に霞は見られない。

「そうしなければ生きて行けなかったッ！だが、そんな人形のように育てられて尚、死に掛けていた俺を救う優しい心を捨てずにいた強きお方ッ！今まで戦いを求め続けられた俺はそんなあの方に救われた！そんな優しい方だからこそ、あの方に禁じられたとしても、俺には主の為に戦う決意があったッ！！」

段々口調が荒々しくなっていくディンの言葉を聞きながらシグナムは苦しそうに顔を歪める。

それは剣戟に苦しんでいたのでは無く、彼の思いに共感している自分が居たからだ。

戦う事しか求められなかった守護騎士と言つ彼らに、はやては服を与え食事を与え、家族と言つ絆を与えた。

そんな主はやてだからこそ、蒐集を禁じられてもそれに背き、救おうともがいた自分たち。

(似ている、あまりにも我らに……！)

「だが、一人ではあの方を救う事が出来なかった！あの方は裏に居る奴にある処置を施され、自分に危害を加えようとするものを排除する様になっていた！！だからせめて、せめてあの方が苦しまぬように！」

彼は嘗て戦った。

アレンを自由にする為に、自分の命を犠牲にしてもと言つ決意を胸に挑んだ。

だがそれは、他ならぬアレンの手によって阻まれた。

虚ろな目をしたアレンを見たディンの心は折れてしまった。

「せめて主の願いをそのままにッ……！」

彼にアレンを傷つける事などできなかった。

だから、彼はアレンの望みが叶うように尽力し、今も言われた事を遂行するため、その力のすべてを注ぎ込む。

ディンの一撃に宙に放られたシグナムは空中で一回転し、勢いを殺しきれなかった分を砂埃を上げ滑って行き着地した。

「諦め、主の願いをそのままに……か。貴様は嘗ての我々なのだな」  
だからこそ、シグナムには負けられない理由が新たに出来た。

「ここで私が負けてしまえば、昔の自分を肯定してしまう事になる。  
あの行動の全てを否定する事は出来ないが、肯定する事はもっと出  
来そうにない」

「なにをッ！」

「お前も奴も、助けを求めれば良かったッ！！」

防戦一方だったシグナムが、今度は攻勢に転じる。

負けじとその剣に合わせるデイン。

互いの武器はその肌を掠り、傷を量産していく。

「一人でできる事など限られている！だが、人は一人ではない！」

シグナムはあの当時を思い出す。

話し合いを持ちかけてきたなのは達を突っぱねるシグナム達。

しょうがない理由があったとしても、あの時話し合いに応じていれ  
ば、もっと違った未来があった筈だ。

今更それを後悔する事等しないが、それでも、そんな未来があった  
らと夢想してしまう。

「あの時の我らと違い、奴には友が居るのだからッ！」

「っ！！」

デインはその言葉に齒噛みする。

アレンは反対される事を承知で最後にゲームと称し、この戦いの場を準備した。

ゴーレムやフェリオンまで呼び時間制限まで設けて、無意識か意識的かは解らないが、戦力的に友が来るようにするしかないようにしている。

それはアレンが友に何かを期待している事に他ならない。

デインはアレンが不器用である事を知っている。

人と接した機会が無い彼が自分の思いの丈を相手にぶつける事などできない事を知っている。

確かにデインは彼らに期待していた、アレンを救えるのではないかと。

だが、既に諦めてしまった心はそれを受け入れるには余りにも頼りなかった。

その結果、今の現状を生んだのなら、デインがアレンの背を押していたら変わったのだろうか。

仲間に助けを求めるように背を押していたら……。

「だがっ！今更ッ！！」

「今だからこそだッ！！」

お互いの炎を纏わせた一撃は激しい衝撃音を伴い爆発した。

中心点に居た二人は対角線上に飛ばされ、壁に激突する。

おそらく二人は既に限界だろう。

それでも朦朧とする意識の中で、負けられない思いを抱き、最後の一撃を準備する。

「駆けよ……ッ！」



剣と鞘を繋ぎその形状を弓と変え、最大の一撃の力を高める。

「燃え猛り狂え……ッ！」

デバイスとデバイスを接続し、長い一本の槍にした武器に同じ様に魔力を集中させていく。

次の一撃が共に最後の「一撃になる事」を悟る。

真面に喰らえばおそらく死ぬだろう「一撃を迷う事無く両者は放つ。」

「隼ッ！！！」

「ヒサール屠殺者ッ！」

神速で飛ぶシグナムの放つ矢と槍と一体化したかのような炎を纏い、突撃するデイン。

今までと違う真に正面からのぶつかり合い。

線と点によるぶつかりでは無く、点と点によるぶつかり合いは力を出し切り、武技では無く力と力、原始的な決着の付け方によって決せられる。

ユニゾンによる出力向上を持って尚破れず、二つのデバイスによって補助を受けて尚貫けない。

両者の力は拮抗する。

「願いと誰かに助けを求めたとしても、自分で叶え初めて意味を持つ！騎士のお前が彼の願いを叶えたとしても、彼の心には響かないッ！！！」

「ッ！？？」

臨界を迎えた力がその場で爆発し、部屋全てを粉塵によって包み込む。

弓による攻撃で距離があつたシグナムはまだ被害は少ないが、槍を持って突撃をしていたデインはその爆発を至近距離から受けた事になる。

「……既に立つてはいまい。死んでいるかもしれないな……」

静かに佇み、煙が張れるのを待つシグナム。

あれだけの騎士が死んでしまうのは惜しいと、息がある事を祈っていた。

「感謝する。騎士シグナム」

「なっ!？」

「貴女のおかげで目が覚めたようだ。だが、この場での勝利は私が貰う。大人しく眠って戴きましよう……」

煙が張れると目の前にデインが立っていた。

信じられないような目で見るとシグナム。

だが、その姿は既に死に体、立っている事が不思議でならない姿で、デバイスも一機粉碎していた。

若干の焦りを抱いたシグナムだが、直ぐに距離を取ろうとしたところで意識を刈り取られた。

勝利を確信し生じた油断を突き、デインはシグナムを下した。

激しいぶつかり合いの後のあまりにも呆気ない決着だった。

長く伸びた槍が辛うじて爆発の発生圏内から遠ざけ、デインの異常とも言えるタフさが、奇跡的に勝利を齎した。槍兵としての基本とも言えるタフネス、それが勝因となった。

「……そう、忘れていたのです。過去の戦士としての自分と、今のあの方の騎士としての自分を……。戦士とは敵を屠る刃、騎士とは主を守る盾。敵を屠るだけが騎士ではない、ましてや願いを叶えるのも騎士ではない、願いの成就を共に歩き、あらゆる者からその身を守り、時には後押しするのが我らの役目」

倒れるシグナムを壊れ物のように壁に寝かせ微笑みを浮かべる。

「ああ、やはりあなたは騎士の鏡だ。過去がどうあれ、あなたと戦った私がこれで終わってしまうのは貴女への侮辱となってしまう」

ボロボロながら服を整え、デバイスではないがスピアのモノクルを目に掛ける。

「最後のお役目とまいりましょう」

memory・18 (後書き)

戦わせたのは良いけど、この後の考えていた展開的にシグナムさんには負けていただきました。

一応どちらが勝っても可笑しくない、と言う感じで書いたつもりです。

感想などお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1993p/>

---

魔法少女リリカルなのはvivid～王の残照

2011年10月10日11時37分発行